

市内遺跡発掘調査報告書 2

2020 年 3 月

岩沼市教育委員会

市内遺跡発掘調査報告書 2

例　　言

- 1 本書は令和元年度に岩沼市内で実施した発掘調査の成果をまとめたものである。
- 2 出土品整理、及び報告書作成については、2020年1月10日から2月20日まで、岩沼市文化財整理室にて行った。また本書の刊行は国庫補助事業として実施した。
- 3 本書のトレンチ番号は現地調査時に付したものを使用した。また検出遺構の略号は以下のとおりである。
SD：溝跡 SI：竪穴建物跡 SK：土坑 P：ピット
- 4 本書の執筆・編集は、生涯学習課内の協議の上、川又隆央・武田裕光・太田昭夫が担当した。執筆分担については下記の通りである。
川又：第Ⅰ章、第Ⅱ章1-A・2~14
武田：第Ⅱ章1-B（遺物以外）・1-C
太田：第Ⅱ章1-B（遺物）
- 5 発掘調査の実施にあたっては、宮城県教育庁文化財課をはじめとし、各事業主・地権者の方々からご協力をいただいた。
- 6 土層、及び土器の色調は「新版標準土色帖」（小山・竹原：1973）に拠った。
- 7 発掘調査の記録や整理した資料、出土遺物は岩沼市教育委員会が保管している。

目　　次

第Ⅰ章 遺跡の地理的・歴史的環境	1
第Ⅱ章 令和元年度の調査成果	3
1. 原遺跡（第12地点）	3
A. 調査に至る経緯と調査方法	
B. 調査の概要	
C. まとめ	
2. 鶴ヶ崎城跡（第20地点）	30
3. 台遺跡（第3地点）	32
4. 丸山遺跡（第8地点）	34
5. 原遺跡（第9地点）	38
6. 原遺跡（第10地点）	41
7. 鶴ヶ崎城跡（第21地点）	44
8. 原遺跡（第11地点）	45
9. 丸山遺跡（第9地点）	47
10. 二木横穴墓群隣接地	49
11. 下野郷館跡（第30地点）	51
12. 上根崎遺跡（第4地点）	53
13. 原遺跡（第14地点）	54

第Ⅰ章 遺跡の地理的・歴史的環境

岩沼市は宮城県南東部に位置し、東は太平洋を臨み、北は名取市、南は阿武隈川を隔てて亘理町、西は奥羽山脈から派生した陸前丘陵に含まれる高館丘陵で村田町・柴田町と市域を接する。また本市は古代では東山道と、東海道から延びる連絡路が合する地点であったが、現在でも国道4号と同6号、JR東北本線と同常磐線の合流地点であり、交通要衝の地として知られている。

縄文時代の遺跡は、岩沼西部丘陵・長岡丘陵・二木・朝日丘陵に存在する。調査が実施された遺跡は少ないが、鵜ヶ崎城跡【23】では縄文時代早期末～前期、山畑貝塚【9】では縄文時代中期～後期、下塙ノ入遺跡【14】では縄文時代後期～晩期の土器が確認されている。

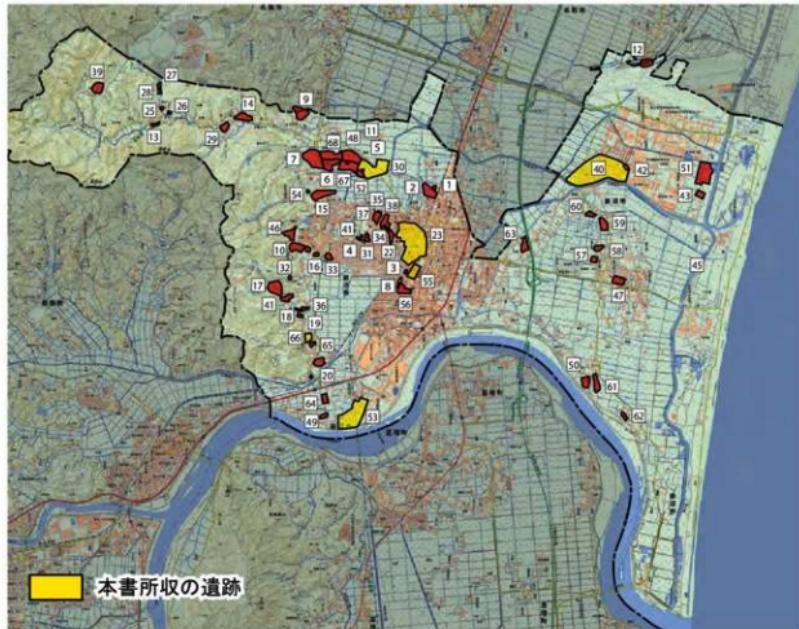
弥生時代の遺跡も調査が実施された遺跡は少ないが、鵜ヶ崎城跡では弥生時代中期後葉と考えられる竪穴建物跡を検出し、十三塚式に比定される弥生土器、及び石庵丁等の石器が出土している。また朝日古墳群【37】では弥生時代後期の天王山式の土器が確認されている。このほか原遺跡【53】でも出土量は少ないが、石庵丁や土器片が出土している。

古墳時代では集落遺跡として北原遺跡【7】、熊野遺跡【15】で前期集落が、原遺跡では後期から終末期の集落が確認されている。高塚古墳は、岩沼市史編纂事業に伴い調査を実施した県指定史跡かめ塚古墳【1】において、くびれ部付近の周溝の底面から木製鋤が出土している。横穴墓は岩沼丘陵から東西に派生する低位丘陵斜面の凝灰岩層露頭面で多く造営され、丸山横穴墓群【3】、二木横穴墓群【8】、長谷寺横穴墓群【10】、平等山横穴墓群【16】、引込横穴墓群【31】、土ヶ崎横穴墓群【22】などで調査が実施され、各横穴墓群から須恵器、土師器、金属製品、玉製品、人骨などが出土している。

古代の遺跡では、原遺跡の調査が近年注目を集めている。これまでの調査では掘立柱建物跡、木材崩跡、竪穴建物跡、溝跡などの遺構が発見され、また多数の土師器・須恵器などの遺物が出土している。特に8世紀初頭～後半にかけて機能していた掘立柱建物では、建物の主軸方位が正方位を強く意識していることが判明しており、須恵器円面鏡の出土と併せて『延喜式』にみえる「玉前駿家」、あるいは多賀城跡出土木簡に記載される「玉前剣」が存在していた可能性が推量される。

中世の遺跡は、鵜ヶ崎城跡、朝日古墳群、上根崎遺跡【30】、朝日遺跡【38】、下野郷館跡【40】、西須賀原遺跡【50】、丸山遺跡【55】および刈原遺跡【61】などが確認されている。このうち下野郷館跡では志賀沢川沿いで実施した調査において、在地の白石古窯跡群の製品を中心とする中世遺物を多数出土しており、中世段階の集落が河川沿いに展開している可能性が考慮されるようになった。

近世の遺跡は、現在の岩沼市の姿と大きく関係していることから多数の調査成果がある。鵜ヶ崎城跡では岩沼館主の「家中屋敷」と考えられる第1地点の調査が東北福祉大学によって調査が行われている。ここでは地鎮関連の遺構として小穴に大堀相馬焼碗を正位で埋設し、これにかわらで蓋をするように被せた状態のものが検出されている。また竹駒神社境内遺跡【56】では、礎石建物跡、掘立柱建物跡、柱列跡、通路状遺構、神事関連遺構等を検出し、近世陶磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦、土製品、金属製品、及び木製品が出土した。本調査により、向唐門の地下構造のほか、江戸期における社寺境内の空間利用のあり方を確認し、はじめて考古学的な手法により、これまで伝承、言い伝え、棟札、及び古文書などによって語られてきた竹駒神社境内変遷の歴史の一端が明らかとなった。



第1図 岩沼市遺跡地図

表1 岩沼市域の遺跡一覧表

番号	道路名	時代	番号	道路名	時代	番号	道路名	時代
1	分の坂古墳	古墳	25	八森八道跡	?	47	新山東道跡	新良・中世・近世
2	かめ竹西道跡	弥生・古墳	26	八森丘道跡	調文	48	長壁北道跡	調文・古墳・古代
3	丸山横穴墓群	古墳	27	洞門A道跡	調文	49	南二崎道跡	調文・古代
4	白山横穴墓群	古墳	28	洞門B道跡	調文・若葉	50	西瀬戸原道跡	古代・中世・近世
5	新明塚古墳	古墳	29	新宮下道跡	調文・近世	51	鳥大瀬道跡	古墳・古代
6	村の西道跡	弥生・古墳・古代	30	上野崎道跡	調文	52	長倉寺前道跡	近世
7	北原道跡	調文・弥生・古墳・古代	31	引山横穴墓群	調文・弥生・古代・中世	53	原道跡	古墳・古代
8	二木横穴墓群	古墳	32	古内山道跡	古墳	54	中ノ原道跡	中世
9	山御内山原	調文・古代	33	新田道跡	弥生・古墳	55	丸山道跡	中業・近世
10	長谷寺横穴墓群	古墳	34	右田山横穴墓群	古墳	56	竹駒社庵内道跡	中世・近世
11	長塚古墳	古墳	35	鶴見模穴墓群	古墳	57	新宮下道跡	古代
12	碁兵衛谷連道跡	古墳痕	36	埋地古墳	調文・古墳・古代	58	前原道跡	古代
13	大土道跡	調文	37	朝日古墳群	弥生・古墳・中世・近世	59	西千子道跡	中世
14	下原八道跡	調文	38	朝日道跡	古墳・古代・中世	60	細柳道跡	古代
15	熊野道跡	古墳・古代	39	岩瀬道跡	調文・古代・中世	61	利原道跡	古代
16	平等山積穴墓群	古墳	40	下野瀬船跡	古墳・古代・中世・近世	62	高原道跡	中世
17	新船跡	中業	41	白山環	若葉?	63	上中筋道跡	古代・中世
18	雄堤上横穴墓群	古墳	42	雄外道跡	古代	64	猪道跡	古代・中世
19	柏方泉道跡	弥生・近世	43	にち理道跡	古墳・古代	65	猪道跡	古墳・古代
20	長谷小割跡	室町	44	新新新前道跡	調文・古代	66	吉道跡	調文・弥生
22	土・砂横穴墓群	古墳	45	貢山脈(木鬼脇)	近世	67	長塚道跡	調文・古墳
23	鷹・鷹城跡	調文・弥生・中世・近世	46	竹倉道跡	弥生・古墳・古代	68	上小瀬道跡	弥生・古墳・古代

1. 原遺跡（第12地点）

第Ⅱ章 令和元年度の調査成果

1. 原遺跡（第12地点）

A. 調査に至る経緯と調査方法

1. 調査に至る経緯

令和元年8月19日に、原遺跡内で太陽光発電施設建設計画についての協議書が、事業者から岩沼市教育委員会生涯学習課（以下、「市教委」と記す。）に提出された。本遺跡については、平成28年度の圃場整備事業に係る発掘調査により、大型の掘方を有する柱穴列や竪穴建物跡、大溝跡などが発見され、また美濃地方で生産されたと考えられる須恵器円面硯などが出土したことから、『延喜式』に記載される「玉前駅家」、あるいは多賀城跡から出土した木簡に記された「玉前割」の可能性が考慮された。翌29年度以降からは遺跡範囲、及び内容確認の調査が開始され、大型の掘立柱建物跡をはじめとする官衙的な遺構・遺物の発見が相次いでいる。このため、今回協議書が提出された段階で、市教委は本遺跡へ与える影響が大きいと想定されたことから、宮城県教育庁文化財課（以下、「県教委」と記す。）との協議が必要となる旨を事業者へ回答した。その後、県教委から事業予定地が原遺跡の範囲に含まれているため確認調査を実施する必要があるとの回答が寄せられ、令和元年9月17日付けで事業者より埋蔵文化財発掘の届出が提出されたことから、令和元年10月3日より、遺構・遺物の有無把握と本調査を実施する場合の費用積算を目的とした確認調査を実施することになった。

2. 調査方法と調査経過

上述のように令和元年10月3日から確認調査を開始した。調査はまず、発電施設建設予定箇所に長方形の細長い調査区（以下、「トレント」と記す。）を設定することから開始した。発電施設建設予定箇所は5列であるため、建設施設の長さを考慮して当初は各列の両端と場合によっては中央にトレントを設定することにした。トレントの設定は北列から開始し、順次南側にかけてトレントの名称を付した。そしてトレントの設定が終了した北列の1トレント東側から重機を用いて表土掘削を開始した。なお、調査成果については後述するが、遺構・遺物は1・2トレントでは極めて希薄であったが、3～5トレントにかけては竪穴建物跡を中心に濃密な分布状況であった。このため、事業者側と計画の変更も視野に入れた再協議を実施したところ、南側の4・5トレント部分については発電施設の設置を断念することになった。しかしながら、3トレントについては計画の変更が困難であることから、3トレントについては記録保存を目的とした調査を実施することになった。また併せて4・5トレントについては確認できた遺構の図面作成と、遺構の年代観などを把握するために最低限の掘り下げを行うことになった。

この協議を実施している段階である10月13～14日にかけて、記録的な豪雨となった台風19号が



第2図 原遺跡調査地点位置図 (①)

1. 原遺跡（第12地點）

本県に襲来した。岩沼市内においても土砂崩れや冠水の被害が相次いだが、調査地点も例外ではなく敷地全体が水没し、その後の復旧には多大な時間を費やすこととなった。

3トレンチの全体的な調査に着手できたのは、11月5日になってからであり、遺構精査、遺構掘り下げを11月21日にかけて行った。遺構の平面測量に際しては、これまでの調査成果との整合性をはかるために岩沼市が設置した2級基準点、及び圃場整備事業の際に設置された3級基準点を使用した。なお、岩沼市設置の基準点数値については、国土地理院がweb上で公開している「平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震」による地盤変動を補正するバラメーターファイルを用いて補正を行った数値である。このほか調査では、隨時デジタル一眼レフカメラを用いて写真撮影を行っているが、ドローンを用いた空撮を2回実施している。

B. 調査の概要

1. 基本層序

今回の調査地点は畠地として利用されていた。このため確認された基本土層の上層は、水田として利用されているJR常磐線西側で確認されている土層とは若干異なる。しかしながら、本調査地点でIVb層とした黒褐色粘質シルトは第1次調査以降から認められるものであり、遺跡内において広範囲な堆積が推定できる。この土層は層位の乱れが少なく、厚みも10～15cmほどと安定しており、付近での調査の掘削に際しては遺構確認面までの指標となる。

一方で、第3次調査をはじめとしたJR常磐線西側の調査地と大きく異なる層序としては、本調査においてV層とした黄褐色砂質シルト以下の堆積である。これまでの調査ではこの層序の下位には10～20cmほどの厚みを持つ黒褐色粘質土と、その下では褐色粘質土の厚い堆積が確認されているが、今回の調査では、3トレンチのSD13大溝跡の西側壁以西では黒褐色粘質土の厚い堆積がみられたものの、確認した範囲では東側での黒褐色粘質土の確認はない。現在は平坦な地形であるが、第4図に示したように、本調査地点では西から東への傾斜はすべてのトレンチで認められている。この状況はV層以下の旧地形に大きく起因するものと考えられる。

2. 発見された遺構と遺物

調査の結果、確認した遺構は竪穴建物跡8棟、溝跡9条、土坑3基、柱穴跡である。柱穴跡は掘立柱建物跡に確実に組むものは確認されていない。出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、石製品、鉄製品などがあるが、量的には少なく、平箱で4箱弱である。その中で図示できた遺物は28点である。ここでは遺構に関わる遺物は遺構ごとに、関わらないものは最後に一括して掲載している。なお土師器、須恵器は古墳時代終末から古代にかけての7世紀から10世紀にかけてのものである。以下、各遺構種別ごとに概略を示す。

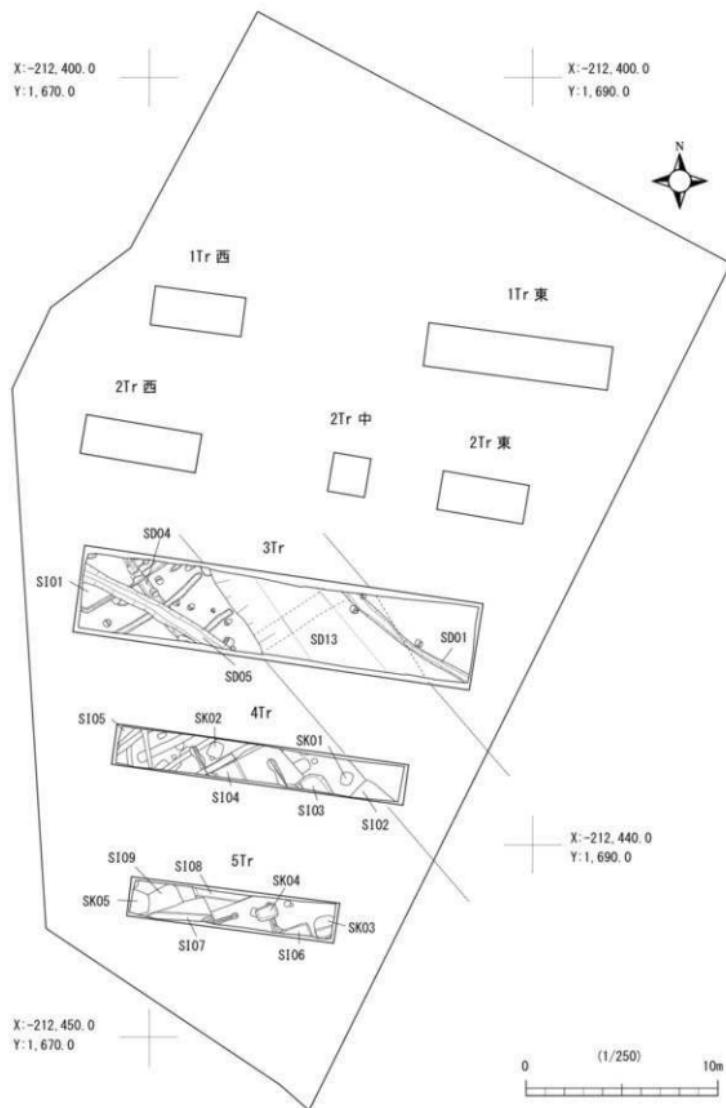
a. 竪穴建物跡

SI01 竪穴建物跡（第5図）

3トレンチ西側に位置し、東西1.3m以上、南北3.7mを測る。幅の狭いトレンチ調査であるため、平面形状については不明である。主軸方位はカマドの煙道でN-60°-Eである。SD04、P25より新しく、SD05より古い。確認面からの深さは0.3m、壁はほぼ垂直に立ち上がる。東壁下と南壁下で周溝を確認した。床面は平坦で貼床を施す。カマドは北壁東寄りに構築され、両袖と煙道を確認した。遺物に

第II章 令和元年度の調査成果

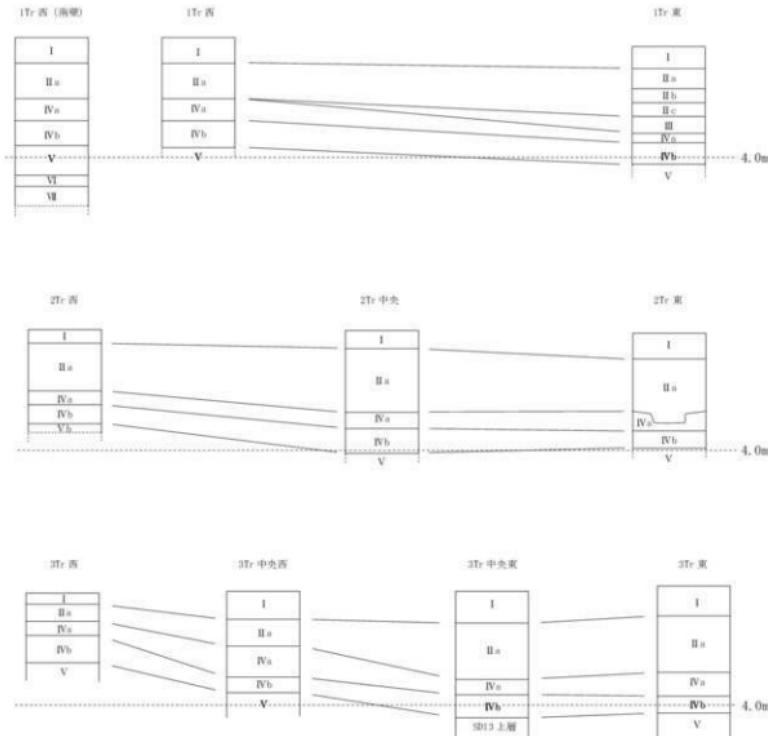
1. 原遺跡（第12地点）



第3図 原遺跡第12地点遺構全体図

第II章 令和元年度の調査成果

1. 原遺跡（第12地点）



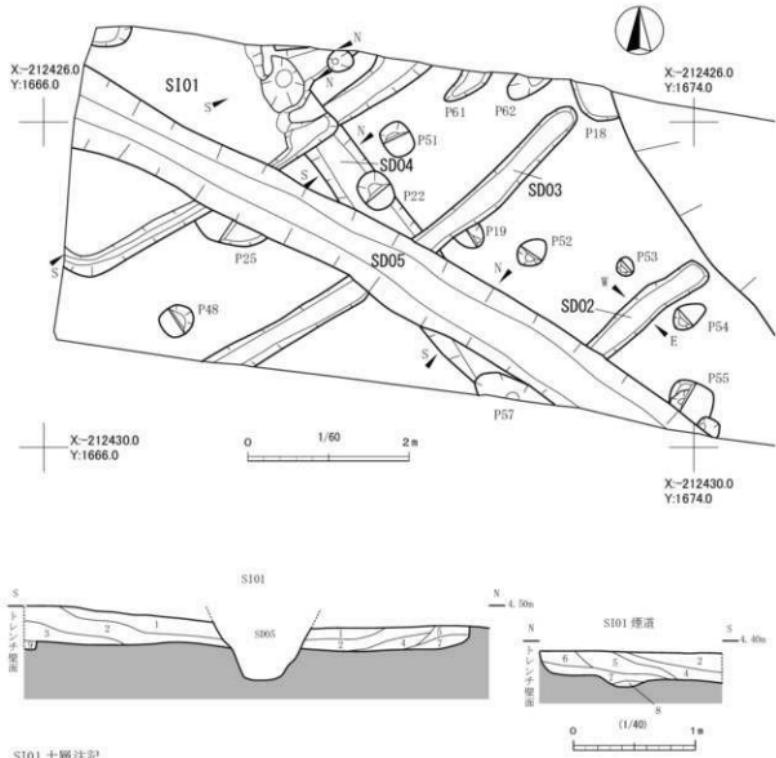
基本土層記

層No.	土色	土質	備考
I	黒褐色	10YR3/2	シルト 耕作土。しまり強い。粘性弱い。
II a	暗褐色	10YR3/3	シルト 旧耕作土。焼土、炭化物粒をやや多く含む。しまり強い。粘性弱い。
II b	褐色	10YR4/6	シルト 旧耕作土。焼土、炭化物粒を少量含む。しまり強い。粘性弱い。
II c	褐色	10YR4/4	シルト 旧耕作土。Ⅲ層小ブロックを少量含む。しまり強い。粘性弱い。
III	黄褐色	10YR5/6	砂質シルト 灰白色粘土中～小ブロック、酸化鉄をやや多く含む。しまり強い。粘性弱い。
IV a	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト Ⅲ層中～小ブロックをやや多く含む。しまり強い。粘性やや強い。Ⅲ層とⅣ層の漸移層。
IV b	黒褐色	10YR3/1	Va層小ブロックを少量含む。しまり強い。粘性やや強い。
V a	黄褐色	2.5YR5/6	粘質シルト 灰白色粘土小ブロックを少量含む。しまり強い。粘性やや弱い。
V b	黄褐色	10YR5/6	砂質シルト 砂を多く含む。しまりやや強い。粘性やや弱い。
VI	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト 明青灰粘土中～小ブロックを多量含む。しまりやや弱い。粘性やや強い。
VII	灰オリーブ	5Y4/2	粘質シルト しまりやや強い。粘性強い。

第4図 基本土層柱状図

第II章 令和元年度の調査成果

1. 原遺跡（第12地点）



S101 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR3/4 粘質シルト	にぶい黄褐色粘土小ブロックをやや多く、炭化物を微量含む。しまり強い。粘性やや弱い。
2	暗褐色	10YR3/3 粘質シルト	にぶい黄褐色粘土粒～小ブロック、炭化物を少量含む。しまり強い。粘性やや弱い。
3	暗褐色	10YR3/4 粘質シルト	にぶい黄褐色粘土粒～小ブロックをやや多く、炭化物を微量含む。しまり強い。粘性やや弱い。
4	黒褐色	10YR2/3 粘質シルト	にぶい黄褐色粘土粒～小ブロックを多く、焼土・炭化物を微量含む。しまり強い。粘性やや強い。
5	暗褐色	10YR3/3 粘質シルト	にぶい黄褐色粘土小～中ブロックをやや多く、焼土小ブロックを多く、炭化物を微量含む。しまりやや弱い。粘性やや強い。縫道
6	暗褐色	10YR3/4 粘質シルト	にぶい黄褐色粘土小ブロックを少量、焼土、炭化物を微量含む。しまりやや強い。粘性やや弱い。縫道
7	黒褐色	10YR2/3 粘質シルト	にぶい黄褐色・灰黄褐色粘土小～中ブロックを多く、焼土小～中ブロックを多く、炭化物を微量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。縫道
8	極暗褐色	2.5YR2/3 粘質シルト	焼土粒を極めて多量含む。しまり弱い。粘性やや弱い。縫道
9	暗褐色	10YR3/3 粘質シルト	にぶい黄褐色粘土小～中ブロックを多く含む。しまりやや強い。粘性やや強い。周溝

第5図 S101

1. 原遺跡（第12地点）

は堆積土のほかに、煙道、貼床、周溝から出土した土師器、須恵器があるが、図示できたものはない。これらの中には体部内面カキ目調整の土師器甕や口縁端部がシャープな作りの須恵器甕が含まれている。本建物跡は後述する8世紀末から9世紀前葉頃のSD05に切られていることから、それ以前の時期の建物跡と推定される。

SI02（第3図）

4トレンチ東側に位置し、東西1.3m以上、南北1.7m以上を測る。主軸方位は東壁でN・53°・Wである。SD06と重複し、これより新しい。幅の狭いトレンチ調査であり、掘り下げを実施していないことから全体の形状・規模については不明である。精査はしておらず、詳細な時期は不明である。

SI03（第6・7図）

4トレンチ東側に位置し、東西1.3m以上、南北1.2m以上を測る。幅の狭いトレンチ調査であるため、平面形状については不明である。主軸方位はカマドの煙道部でN・34°・Wである。SI04と重複し、これより新しい。確認面からの深さは0.5m、壁は垂直に立ち上がる。カマドは北壁に構築され、右袖と煙道を確認した。周溝や貼床、主柱穴は確認できなかった。遺物には堆積土、床面、煙道部から出土した土師器、須恵器があり、3点が図示できた。1は煙道部末端のピット堆積土から破片が重なつて出土したもので、煙出しの煙突として再利用された可能性も考えられる。これはロクロで製作された長胴形の土師器甕で、体部外面には二次的にヘラナデによる粘土貼り付けがなされている。こうした粘土貼り付けの例としては賀美郡家跡の推定地と考えられている加美町東山遺跡のSI432、SI433出土の土師器甕と、SK450出土の須恵器甕がある（多賀城跡調査研究所 1992）。SI432では非ロクロ甕2点、SI433ではロクロ甕2点の体部外面に粘土の貼り付けがあり、時期については前者が8世紀前半、後者は9世紀初頭頃と考えられている。また古代官衙と密接に関連する集落跡として知られる栗原市原田遺跡でも、SI30から出土した土師器甕に粘土を貼り付けた例が確認される（宮城県教育委員会 2009）。これは非ロクロで8世紀後半の土器群の一つとされている。近くの例では蔵王町堀の内遺跡第11号竪穴住居跡出土土器の土師器甕があり、特に説明はないがこれも例言や図から判断すると二次的な粘土貼り付けとみられる（蔵王町教育委員会 1997）。時期は7世紀末から8世紀前半とされている。以上の二次的な粘土貼り付けについてはその目的は明確ではないが、本建物跡の場合、煙出しの煙突に再利用する際に作り加えた痕跡の可能性も推測される。2はカマド付近の床面から出土した須恵器甕である。底径が比較的大きく、器形が直線的に外傾するものである。底部は回転ヘラ切りで切り離された後に、一部に軽い手持ちヘラケズリの再調整が行われている。3は須恵器の鉢で、口縁端部が上方につまみ出され、外面体部下半はヘラケズリが施されている。底径が比較的大きく、安定感のある器形である。器形的には色麻町上新田遺跡の第8号住居跡の土師器中形甕とされているものに近似している（宮城県教育委員会 1981）。この上新田遺跡の土器群は村田晃一氏の編年では1群土器に相当し、8世紀末から9世紀前葉頃に位置づけられている（村田晃一 1994）。

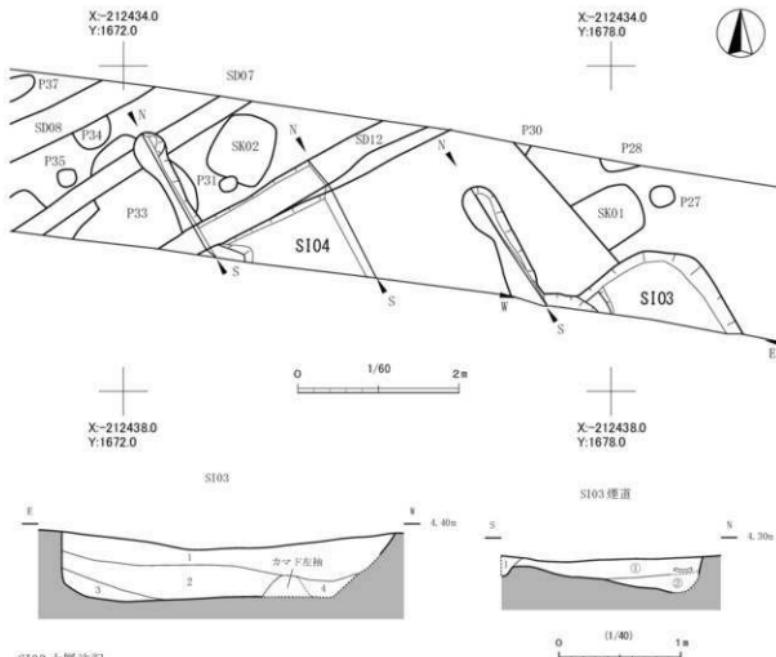
これら3点の土器は大まかに8世紀末から9世紀前葉頃に位置づけられ、本建物跡もその頃の時期と考えられる。

SI04（第6図）

4トレンチ西側に位置し、東西3.5m以上、南北2m以上を測る。幅の狭いトレンチ調査であるため、平面形状については不明である。主軸方位はカマドの煙道部でN・31°・Wである。SD07、P29、P30、P33より新しく、SI03、SD12より古い。確認面からの深さは0.3m、壁はほぼ垂直に立ち上がる。カ

第II章 令和元年度の調査成果

1. 原遺跡（第12地点）



SI03 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト 焼土小ブックを少量含む。しまりやや強い。
2	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト 基本土層V層小ブロックを多量含む。しまりやや強い。
3	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト 基本土層V層小ブロックを多量含む。しまりやや強い。
4	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト 焼土大ブロックへ粒を多量含む。しまり弱い。
①	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト 焼土小ブックへ粒子、炭化物粒を多量含む。しまり弱い。
②	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト 焼土小ブックへ粒子、炭化物粒を微量含む。しまり弱い。

SI04 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト 焼土、炭化物粒を微量含む。しまり弱い。
2	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト 基本土層V層小ブロックを含む。しまり弱い。
①	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト 焼土粒を含む。しまり強い。
②	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト 焼土粒を含む。しまり強い。

第6図 SI03・04

1. 原遺跡（第12地点）

マドや周溝、貼床、主柱穴は確認できなかったが、北壁から伸びる煙道を確認した。遺物には堆積土や煙道部から出土した土師器、須恵器があるが、図示はできなかった。破片資料では土師器は非クロロであり、また本建物跡は前述の8世紀末から9世紀前葉頃のSI03に切られていることから、大まかに7～8世紀頃の時期のものと考えられる。

SI06（第7・8図）

5トレンチ東側に位置し、東西1.6m以上、南北0.7m以上を測る。幅の狭いトレンチ調査であるため、平面形状については不明である。主軸方位はカマドの煙道部でN-15°-Wである。SK04と重複し、これより古い。確認面からの深さは0.4m、壁はほぼ垂直に立ち上がる。カマドや周溝、貼床、主柱穴は確認できなかったが、北壁から伸びる煙道を確認した。遺物には煙道部や床面上から出土した土師器がある。その1点を第7図に図示した。これは北壁付近の床面上から出土した充存に近い土師器壺である。底部が丸底の低平な器形で、外面に明瞭な段や稜をもたないものであり、内面は黒色処理が施されている。この土器の類例としては仙台市中田南遺跡土師器壺の中で非クロロの1C a類としたタイプがある。これは8世紀前葉を中心とした時期のものと考えられている（仙台市教育委員会 1994）。のことから本建物跡は8世紀前葉頃の時期のものと推定される。

SI07（第7～9図）

5トレンチ西側に位置し、東西2.9m、南北1.5m以上を測る。幅の狭いトレンチ調査であるため、平面形状については不明である。主軸方位はカマドの煙道でN-71°-Eである。SI08、SI09と重複し、これらより新しい。確認面からの深さは0.6m、壁は垂直に立ち上がる。カマドは東壁に構築され、左袖と煙道を確認した。周溝や貼床、主柱穴は確認できなかった。遺物には堆積土から出土した土師器、須恵器があり、それぞれ第7図に1点ずつ図示した。土師器は甕の体部から口縁部にかけての破片で、頸部に段を形成せず、口縁部の屈曲はわずかである。体部は外面がハケメ、内面がヘラナデ調整である。須恵器は壺底部で、底部は回転ヘラ切り後に、軽く回転ヘラケズリが施されている。この2点から時期を限定することは難しく、ここでは大まかに8世紀後半から9世紀前半頃と、本建物跡の年代観を考えておきたい。

SI08（第8・9図）

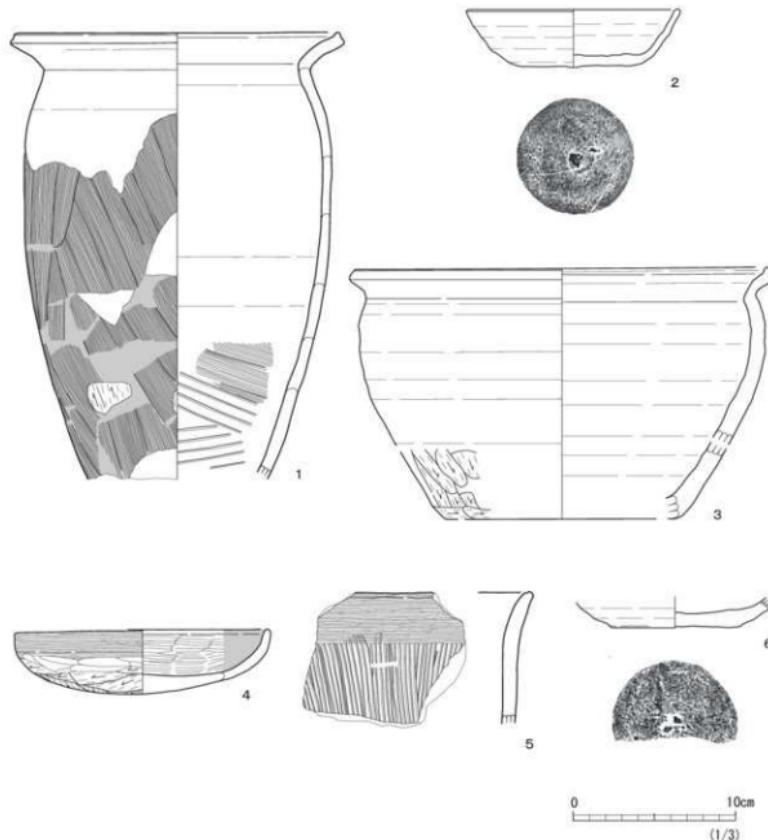
5トレンチ西側に位置し、東西2.4m以上、南北0.6m以上を測る。幅の狭いトレンチ調査であるため、平面形状については不明である。主軸方位は西壁でN-21°-Wと推定される。SI07と重複し、これより古い。確認面からの深さは0.6m、壁はやや斜めに立ち上がる。カマドや煙道、周溝、貼床、主柱穴は確認できなかった。遺物には堆積土出土の土師器が少量あるが、図示はできなかった。土師器壺にはクロロで製作されたものが含まれること、本建物跡が前述のSI07に切られていることから、9世紀前後の時期の建物跡と推定される。

SI09（第8図）

5トレンチ西側に位置し、東西1.2m以上、南北1.1m以上を測る。主軸方位は北壁でN-62°-Eと推定される。SI07、SK05と重複し、これらより古い。幅の狭いトレンチ調査であり、掘り下げを実施していないことから全体の形状・規模については不明である。精査はしておらず、詳細な時期は不明である。ただし、8世紀後半から9世紀前半頃のSI07に切られていることから、それ以前と推定される。

第II章 令和元年度の調査成果

1. 原遺跡（第12地点）

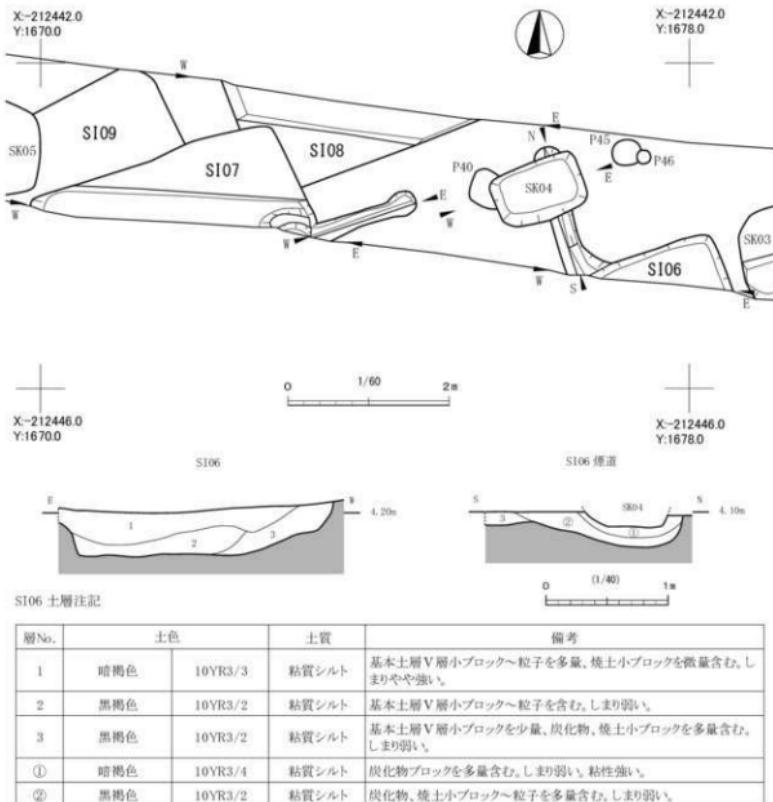


SI03・06・07 出土遺物観察表

番号	遺物・細部	種別	断面	外 面	内 面	性 在	寸法(cm)			写真番号
							上縁	底径	高さ	
1 堆溝泥付小片	土師器	裏	ロコロナギ・ハラケズリ	体部に(2. 次的な)粗土の剥け目があり、その裏にハラチテ剥離が施されている。	ロクロナギ・ハラケムハラチテ	口縁部～体部上 方1/3	30.0			6-5
2 灰釉	粗底器	环	ロクロナギ・底部剥離へラケズリ	一底深い平持ち・ハラケズリ	ロクロナギ	口縁部(2. その 裏面)	16.1	7.0	3.5	6-1
3 標準泡彌	粗底器	跡	ロクロナギ・ハラケズリ		ロクロナギ	口縁部～体部破 片、体部～底部破 片合成	25.5	14.2	15.4	(確定)
4 床面直上	土師器	环	ヨコナギ・ハラケズリ・ヘラジガキ		ヘラジガキ・黒色斑塊	口縁部～体部 上2/3、底部1/1	15.8		4.0	6-3
5 海藻土	土師器	裏	ヨコナギ・ハラケズリ		ヨコナギ・ハラチテ	口縁部～体部上 部破片				
6 海藻土	粗底器	环	ロクロナギ・底部剥離へラケズリ、軽く剥離・ハラケズリ		ロクロナギ	体部下部～底部	1.2		7.5	

第7図 SI03・06・07 出土遺物

1. 原遺跡（第12地点）



第8図 SI06

b. 溝跡

SD01 (第10・11図)

3トレンチ東側に位置し、北西から南東に延びる溝跡である。主軸方位はN-50°～59°-Wである。SD13、P01より新しく、P59より古い。確認全長8.2m、断面皿形で、上幅0.3～0.6m、底幅0.1～0.5m、確認面からの深さは0.1mである。遺物は堆積土から少量の土師器が出土しているが、図示はできなかった。後述のSD13を切っており、9世紀代の溝跡と考えられる。

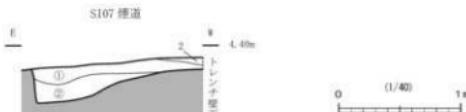
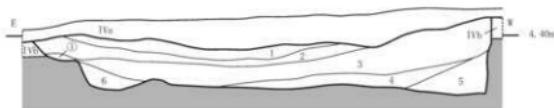
SD02 (第5・10図)

3トレンチ西側に位置し、北東から南西に延びる溝跡である。主軸方位はN-50°-Eである。SD05と重複し、これより古い。確認全長1.7m、断面皿形で、上幅0.3～0.4m、底幅0.2m、確認面からの深さは0.1mである。遺物は堆積土から土師器片1点が出土しているが、図示はできなかった。詳細な時期は不明である。ただし8世紀末から9世紀前葉頃のSD05に切られていることから、

第II章 令和元年度の調査成果

1. 原遺跡（第12地点）

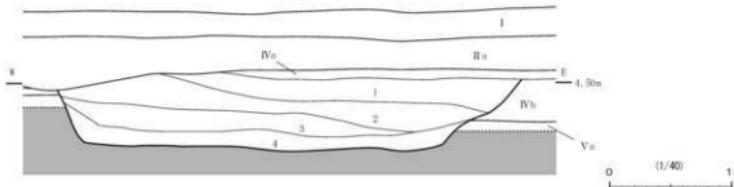
SI07



SI07 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト
2	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト
3	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト
4	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト
5	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト
6	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト
①	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト にごり、黄褐色粘土小ブロックを少量、焼土、炭化物をやや多く含む。しまりやや強い。
②	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト にごり、黄褐色粘土小ブロックをやや多く、焼土、炭化物を少量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。

SI08



SI08 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト しまり強い。
2	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト しまり強い。
3	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト 基本土層V層大～小ブロックを多量含む。人為的堆積とみられる。
4	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト 基本土層V層中ブロックへ粒子を含む。

第9図 SI07・08

それ以前と推定される。

SD03 (第5・10図)

3 トレンチ西側に位置し、北東から南西に延びる溝跡である。主軸方位は N-45° ~ 60° -E である。SD04、P19 より新しく、SD05 より古い。確認全長 5.4 m、断面逆台形で、上幅 0.3 ~ 0.4 m、底幅 0.2 ~ 0.3 m、確認面からの深さは 0.1 m である。遺物は堆積土から少量の土師器が出土しているが、図

1. 原遺跡（第12地点）



SD01 土層注記

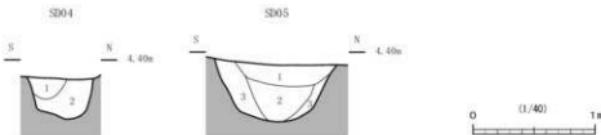
層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト にごい黄褐色・灰黄褐色粘土小～中ブロックが多く、炭化物を微量含む。しまりやや弱い。粘性やや強い。

SD02 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	にごい黄褐色	10YR4/3	シルト 基本土層V層大ブロック～粒子を多量含む。しまりやや弱い。

SD03 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト 基本土層V層小ブロック～粒子を多量含む。しまりやや弱い。
2	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト 基本土層V層大ブロック～粒子を多量含む。しまりやや弱い。



SD04 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	にごい黄褐色	10YR4/3	シルト 基本土層V層大ブロック～粒子を多量含む。しまり強い。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト 基本土層V層大ブロック～粒子を多量含む。しまり強い。

SD05 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト しまりやや弱い。
2	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト 基本土層V層粒子を少量含む。しまりやや弱い。
3	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト 基本土層V層大ブロック～粒子を多量含む。しまりやや弱い。

第10図 SD01～05

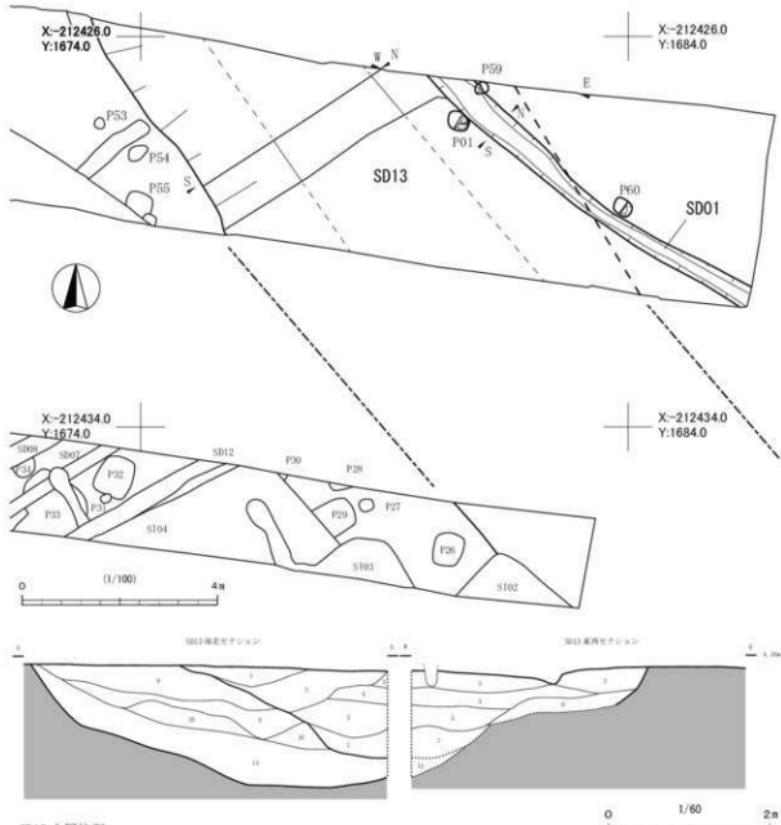
示はできなかった。詳細な時期は不明である。ただし8世紀末から9世紀前葉頃のSD05に切られていることから、それ以前と推定される。

SD04（第5・10図）

3トレンチ西側に位置し、北西から南東に延びる溝跡である。主軸方位はN-38°-Wである。SI01、SD03、SD05、P22、P57と重複し、これらより古い。確認全長3.5m、断面深い皿形で、上幅0.6m、底幅0.3～0.4m、確認面からの深さは0.3mである。遺物は堆積土から少量の土師器が出土しているが、図示はできなかった。詳細な時期は不明である。ただし8世紀末から9世紀前葉頃のSD05に

第II章 令和元年度の調査成果

1. 原遺跡（第12地点）



SD13 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	にぶい黄褐色	10YR5/3	粘質シルト 基本土層V層小ブロックを少量、灰白色火山灰小ブロックを微量含む。しまり強い。
2	にぶい黄褐色	10YR5/3	粘質シルト 基本土層V層小ブロックを多量含む。しまりやや強い。
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト 基本土層V層小ブロックを多量含む。しまりやや強い。
4	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト 燃土、炭化物を少量含む。しまりやや弱い。
5	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト 燃土、炭化物を多量含む。しまりやや弱い。
6	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト 炭化物を少量含む。しまりやや強い。
7	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト 基本土層V層小ブロック～粒子を少量含む。しまり弱い。
8	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト 基本土層V層粒子を微量含む。しまりやや弱い。
9	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト 基本土層V層粒子を少量含む。しまりやや弱い。粘性強い。
10	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト 基本土層V層小ブロック、灰黃褐色粘土中～小ブロックをやや多く含む。しまりやや弱い。粘性強い。
11	にぶい黄褐色	10YR5/3	粘質シルト 基本土層V層大～中ブロック、灰黃褐色粘土大～中ブロックを多量含む。しまり強い。ブロックの混在から人為的堆積とみられる。

第11図 SD13

1. 原遺跡（第12地點）

切られていることから、それ以前と推定される。

SD05（第5・10・12図）

3トレンチ西側に位置し、北東から南西に延びる溝跡である。主軸方位はN-60°-Wである。SI01、SD02、SD03、SD04、P25、P55、P57と重複し、これらより新しい。確認全長9.1m、断面皿形で、上幅0.7～0.9m、底幅0.2～0.5m、確認面からの深さは0.5mである。遺物は堆積土から少量の土師器が出土しており、その中で2層から出土した須恵器壺1点を第12図に図示した。これは底径が比較的大きく、器形が直線的に立ち上がるもので、底部は回転ヘラ切りで切り離した後にほぼ全面手持ちヘラケヅリの再調整が施されている。特徴から8世紀末から9世紀前葉頃の土器と推定され、遺構もその前後に位置付けられる。

SD07（第6図）

4トレンチ西側に位置し、北東から南西に延びる溝跡である。主軸方位はN-57°-Eである。P33、P36より新しく、SI04より古い。確認全長3.1m、上幅0.3mである。掘り下げを実施していないことから、底幅、断面形状、確認面からの深さは不明である。精査はしておらず、詳細な時期は不明である。ただし7～8世紀頃の時期と推定されるSI04に切られていることから、それ以前と推定される。

SD08（第6図）

4トレンチ西側に位置し、北東から南西に延びる溝跡である。主軸方位はN-62°-Eである。P34より新しく、SD09より古い。確認全長3.2m、上幅0.4～0.5mである。掘り下げを実施していないことから、底幅、断面形状、確認面からの深さは不明である。精査はしておらず、詳細な時期は不明である。

SD12（第6図）

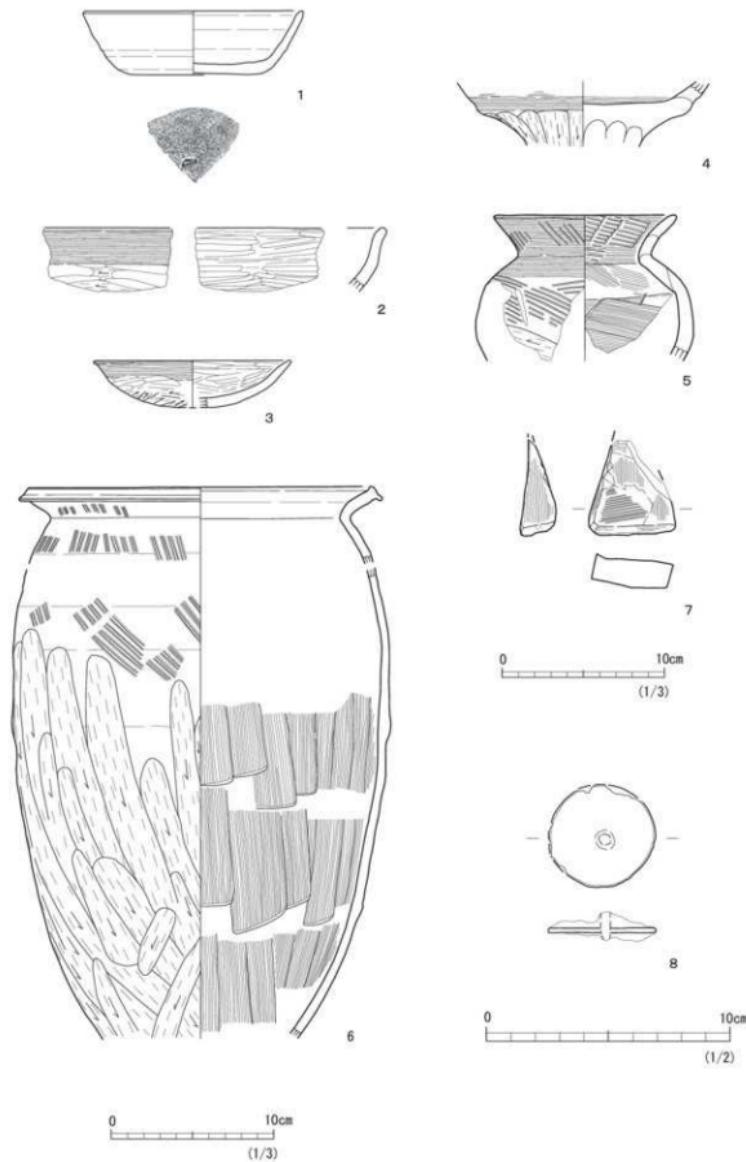
4トレンチ西側に位置し、北東から南西に延びる溝跡である。主軸方位はN-60°-Eである。SI04、P33と重複し、これらより新しい。確認全長3.3m、上幅0.3～0.4mである。掘り下げを実施していないことから、底幅、断面形状、確認面からの深さは不明である。精査はしておらず、詳細な時期は不明である。ただし、7～8世紀頃の時期と推定されるSI04を切っていることから、それ以降と推定される。

SD13（第11・12図）

3トレンチ中央に位置し、北西から南東に延びる大溝跡である。主軸方位はN-35°-Wである。P18より新しく、SD01、P01、P59より古い。4トレンチ北東部までの確認全長15.5m、断面形状は皿形で、確認面からの深さは1.5mである。溝内には11層の堆積土があり、これらは新段階の1～7層と、古段階の8～11層に大別され、2段階の変遷が認められた。調査時の安全確保、及び残土処理の関係から完掘には至らなかったが、確認できた限りでは新段階の大溝上幅は5.5m、古段階の大溝上幅は1.8m以上と推定される。遺物は堆積土から多量の土師器と少量の須恵器、ほかに石製品、鉄製品が出土しており、その中で土師器5点、砥石1点、鉄製の紡錘車1点を第12図に図示した。土師器は非ロクロの壺と高壺、ロクロで製作された甕である。壺の第12図2は底部丸底とみられ、体部と口縁部には稜を形成し、口縁部は軽く外反する器形である。内面はヘラミガキが施されているが、黒色処理については明瞭ではない。こうした特徴を持つものは村田氏編年の5～6段階の壺にみられ、7世紀末から8世紀前半頃と推定される（村田晃一 2007）。同じく甕の第12図3は底部が

第II章 令和元年度の調査成果

1. 原遺跡（第12地点）



第12図 SD05・SD13出土遺物

1. 原遺跡（第12地点）

SD05・13出土遺物観察表

番号	遺構・断面	種別	器種	外 面		内 面	残 在	法面(cm)			写真番号
				口縁	底面			口径	底径	高さ	
1	堆積土層	裏面	环	ロクロナダ・底部凹凸へラケズ	ロクロナダ	全体の1/3	13.6 (推定)	1.3 (推定)	3.9	6-2	
2	堆積土	上部面	环	ヨコナダ・ハラケズ	ハラミガキ	口縁部破片					
3	SD13 堆積土	上部面	环	ヨコナダ・ハラケズ	ハラミガキ	全体の1/4	12.2 (推定)	2.9 (推定)			
4	SD13 堆積土	土師器	壺	ヨコナダ・ハラケズ	ヨコナダ	外部・縁部欠損					
5	SD13 堆積土	土師器	壺	ヨコナダ・ハラケズ	ヨコナダ・ナダ・ハナダ	口縁部1/3、底部 上半1/6	11.2 (推定)				
6	SD13 堆積土	土師器	壺	ロクロナダ・平行タタキ目・ハラケズ	ロクロナダ・ハラケズ	口縁部・全体1/3	21.2 (推定)				6-6
7	SD13 堆積土	石製品	砾石 えんせき	砾石面は片面一側面。右側は凝灰岩とみられ。粒子が細かいことなどから土上げ砾と考 半丸			長さ35.0、幅3.3、厚さ1.7、 重さ30.0kg				
8	SD13 堆積土	石製品	砾石	礫化のため軽軽く約軽の部分は推定		新輪及び導輪の 一部	径4.4、厚5.0、孔径6.0推定				

丸底の低平な器形で、緩やかに内窓しながら立ち上がり口縁部で軽く外反するものである。内面は一定しないハラミガキが施されており、黒色処理は認められない。色調は内外面とも他の非ロクロ壺とは異なり、浅黄橙色をなす。形態的な特徴からは底部が丸底から平底に移行する8世紀前半頃のものと推定されるが、なお類例を待ち検討してみたい。高壺の第12図4は壺部の体・底部が段をもつもので、壺部外面はヨコナダ、体・底部外面はハラケズが施されている。類例は仙台市南小泉遺跡11号住居跡（仙台市教育委員会 2003）にあり、これはおよそ8世紀前半頃の年代が考えられている。第12図5の壺は体部が球形をなし、口縁部が強く外反するものである。類例としては多賀城市山王遺跡八幡地区のSD2050Bの堆積土各層から出土した壺B類としたものがある（宮城県教育委員会 2001）。SD2050Bの堆積土の年代については6世紀後半から7世紀中葉までの幅があり、本土器もおおよそその頃に推定できる。

第12図6はロクロ成形による長胴形の壺である。口縁端部の作りはシャープで、外面上半にはロクロ成形前の平行タタキ目が各所に残っている。土師器製作にロクロが導入された頃の村田氏編年では8段階、8世紀末から9世紀前葉頃のものと推定される（村田晃一 2007）。

このほかにSD13からは非ロクロの土師器壺では体部外面に段や稜をもつ底部丸底のもの、内外面黒色処理が施されているもの、土師器壺では底部に木葉痕が認められるもの、ロクロ製作の土師器壺では底部が回転ヘラケズ再調整のものなどがあり、須恵器では外面に平行や斜格子タタキ目、内面に同心円のアテ目を残すものがある。

SD13は前述したように堆積状況から大きく2時期の変遷が考えられる。遺物については時期ごとに分けて取り上げることは徹底できなかったが、出土土器からは古段階は6世紀後半から8世紀前半頃、新段階は8世紀末から9世紀代に大きく位置付けることが可能だと考えられる。そして堆積土の最上層には10世紀前葉頃に降下したと考えられている灰白色火山灰がブロック状に含まれており、10世紀前葉頃にほぼ埋没したものと考えられる。

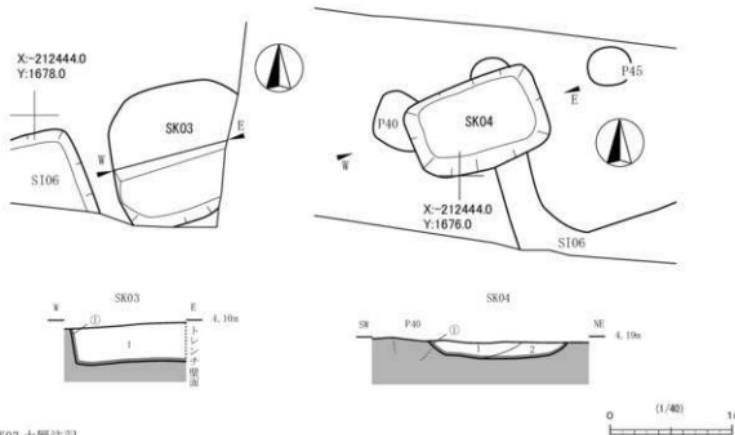
c. 土坑

SK03（第13・14図）

5トレンチ東側に位置し、他の遺構との重複関係はない。幅の狭いトレンチ調査のため、平面形状については不明である。東西1.0m以上、南北1.2m以上、断面逆台形で、確認面からの深さは0.3mである。底面、及び壁面付近には炭化物や焼土が多量含まれていた。遺物には堆積土出土の土師器があり、その1点を第14図に図示した。これはほぼ完存の小型壺で、底部は丸底風平底で、最大径の体部上方で強く屈曲し、口縁部が短く直立する形態のものである。器形や調整などから一見すると

第II章 令和元年度の調査成果

1. 原遺跡（第12地点）



SK03 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト 炭化物、焼土粒子～小ブロックをやや多く含む。しまり弱い。
①	赤褐色	2.5YR7/8	炭化物層 炭化物、焼土小～大ブロックを極めて多量含む。しまり強い。遺構底面。

SK04 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト 炭化物、焼土小ブロックを微量含む。しまり弱い。
2	黒褐色	10YR3/3	粘質シルト 炭化物、焼土粒子～小ブロックをやや多く含む。しまりやや強い。
①	赤褐色	2.5YR7/8	炭化物層 炭化物、焼土小～中ブロックを極めて多量含む。被熱した遺構底面。

SK06 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト 基本土層V層大～小ブロックおよび粒子を多量含む。しまり弱い。人為的な堆積の可能性がある。

S101Pit 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	10YR3/2	シルト 基本土層V層小ブロック～粒子を多量含む。しまり強い。

第13図 SK03・04・06

1. 原遺跡（第12地点）



SK03 出土遺物観察表

番号	遺構・部品	種別	器種	外　面	内　面	残　存	法面(cm)			写真番号
							口縁	底径	深さ	
I	SK03	土師器	小型壺	ヨコナダヘラナダハケルヘクシガタ	ハケルヘラナダヨコナダ	全体の3/4	7.8	6.3	6-8	

第14図 SK03 出土遺物

古墳時代前期に属するものともみられるが、本土坑付近、及び本調査ではこの時期の土器は出土しておらず、古代の土器が主体である。またこれまでの本遺跡調査でも今のところ出土例はない。本例のような小型壺は器形はやや異なるが、仙台市郡山遺跡のI・II期宮衙に属する遺構の出土土器中にも散見され、7世紀後半から8世紀初頭頃の一つの構成器種だったものと推定される。ここでは本土器、及び遺構の時期もその頃に推定しておきたい。

SK04（第13図）

5トレンチ東側に位置する。SI06 煙道、P40と重複し、これらより新しい。平面長方形で、東西1.1m、南北0.7m、断面皿形で、確認面からの深さは0.1mである。底面、及び壁面付近には炭化物や焼土が多量含まれていた。遺物には堆積土出土の土師器が少量あるが、図示はできなかった。土師器にはロクロで製作された壺や甕が含まれていること、本土坑が前述した8世紀前葉頃のSI06を切っていることから、9世紀頃の土坑と考えられる。

SK06（第13図）

3トレンチ西側に位置する。SI01、SD05と重複し、これらより古い。幅の狭いトレンチ調査のため、平面形状については不明である。東西0.8m以上、南北1.4m、断面箱形で、確認面からの深さは0.3mである。精査はしておらず、詳細な時期は不明である。ただし、8世紀末から9世紀前葉頃のSD05に切られていることから、それ以前と推定される。

d. その他の遺物（第15図）

遺構に関わらない遺物で図示したものには赤焼土器1点と弥生土器12点がある。

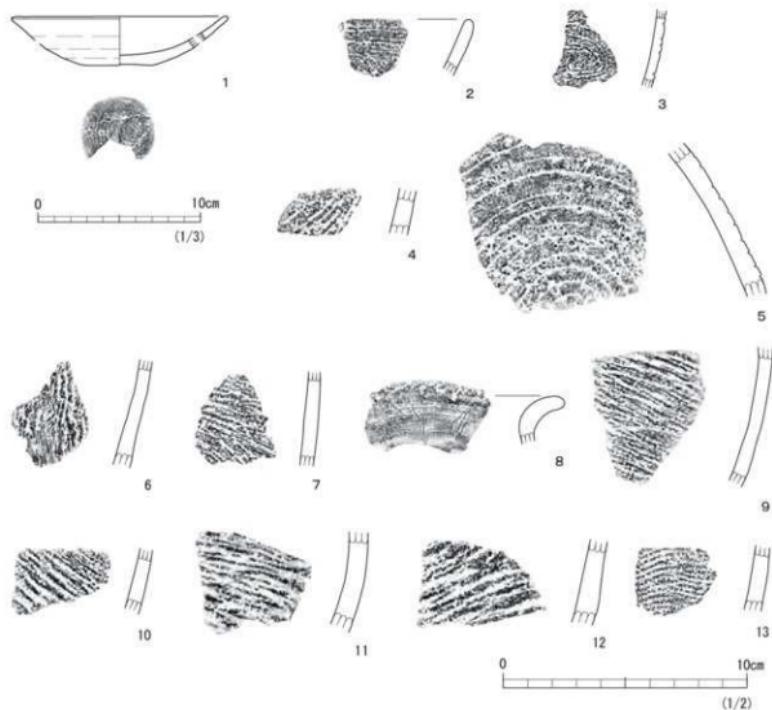
第15図1は同一個体とみられるものを合成した図である。赤焼土器の小皿とみられ、ロクロで製作され、底部は回転糸切りの後の再調整はない。器形は体部がやや内湾しながら立ち上がり口縁部がそのまま外傾するものである。類例には多賀城市多賀城跡第61次調査の第7層出土の須恵系土器の壺とされているもの（多賀城跡調査研究会 1992）、同市山王遺跡多賀前地区の溝跡から出土した第5群の赤焼土器（宮城県教育委員会 1996）とされているものなどがあり、これらは村田氏編年の7群土器を構成する土師器小皿と特徴が共通している（村田晃一 1994）。年代としては10世紀後半を中心とする頃に位置付けられている。

原遺跡ではこれまでの調査で、10世紀前葉に降下したと考えられている灰白色火山灰以降の土器については未発見だったが、本調査で初めてその存在が確認された。今後の調査でこの時期の遺構が発見されるものと考えられる。

弥生土器には二本描きの細沈線により山形文や溝文、同心円文などの文様が施文されているもの（第15図2～5）と撚糸文などの地文のみのもの（第15図6～13）がある。前者は名取市十三塚

第II章 令和元年度の調査成果

1. 原遺跡（第12地点）



第15図 その他の出土遺物

その他の出土遺物観察表

番号	地区・層位	種別	器種	外　面	内　面	残　存	法面(cm)			写真番号
							上層	中層	下層	
1	BTy 海塩中	赤燒土器	小豆	ログロナデ・底部凹凸切口、再調整なし。	ログロナデ	13縫合1/3、底部 ～底部1/2を合成	13.2 (測定)	4.2 (測定)	3.0 (測定)	
2	SD05 海塩土	赤生土器	糸	二本縫の側面圧による横化丸継文と山形文	ヘラジガキテ	13縫合破片				7-2
3	SD13 海塩土	赤生土器	糸	二本縫の側面圧による横化丸継文	不明	13縫合破片				7-2
4	BTy 海塩中	赤生土器	糸リ	二本縫の側面圧による文様	不明	13縫合破片				7-4
5	STy 波打付	赤生土器	基	二本縫の側面圧による上同心円文	ヘラジガキ	13縫合破片				7-5
6	S101 海道	赤生土器	糸リ	横点文00	不明	13縫合破片				7-6
7	P25	赤生土器	糸リ	横点文00	不明	13縫合破片				7-7
8	P33	赤生土器	便	13縫合部の埋文不明、ヨコナデ	ヨコナデ	13縫合破片				7-8
9	S104	赤生土器	便	横点文00	ヘラジガキ	13縫合破片				7-9
10	S104	赤生土器	便	横点文00	ヘラジガキ	13縫合破片				7-10
11	BTy 海塩中	赤生土器	便	横点文00	不明	13縫合破片				7-11
12	GTy 海塩中	赤生土器	便	横点文00	不明	13縫合破片				7-12
13	SD06 海塩土	赤生土器	便	単周織文00	不明	13縫合破片				7-13

1. 原遺跡（第12地点）

遺跡出土土器を標識に設定された中期後葉の十三塚式とされているものの特徴とされており（伊東信雄 1957）、岩沼市域では熊野遺跡（岩沼市教育委員会 2019）、朝日古墳群（岩沼市教育委員会 2007）、鶴ヶ崎城跡（岩沼市教育委員会 2005）などでも土器が出土している。鶴ヶ崎城跡からはこの時期の可能性のある堅穴建物跡も1軒確認されている。後者の地文のみのものも十三塚式にもみられる特徴であり、前者に伴ったものと考えられる。

原遺跡からはこれまで、弥生時代関連の資料として1次調査では石庵丁が、3次調査では中期後半から後期頃の土器などが発見されている（岩沼市教育委員会 2019a）。今回の調査でさらに北東に200～300m離れた地点まで分布が広がることが確認された。

C.まとめ

原遺跡第12地点の調査は、5本のトレンチを設定した確認調査によって、7世紀末から9世紀前半頃につくられた堅穴建物跡8棟と大溝跡1条（SD13）、溝跡12条、土坑6基、柱穴跡を確認した。

これまでの調査成果から、常磐線の西側では本遺跡の北側に多数の堅穴建物跡が分布することが分かっている。今回の調査で常磐線の東側でも多数の堅穴建物跡が発見されたことは、玉前駅家・玉前刻（関）と推定される施設の維持や管理にかかわる人々の居住域がさらに広がることが明らかとなつた。

また、SD13 大溝跡は土層の堆積状況から2時期の変遷が考えられ、新しい段階は上幅5.5m、確認面からの深さ1.1mである。堆積土上層に灰白色火山灰を小ブロック状に含み、ロクロ製作の土師器甕などが出土していることから9世紀代に機能し、10世紀前半頃に埋没した可能性がある。古い段階の大溝の堆積土中からは、非ロクロ成形の土師器が多く出土しており、開削の時期は古墳時代終末期頃までさかのぼる可能性がある。なお、大溝の外側（北・東側）では遺構が極端に減少することから、この地につくられた施設全体を囲う目的で開削された可能性や、規模の面からは阿武隈川から物資等を運び入れるためにつくられた運河、あるいは水路の可能性も考えられる。

さらに、この大溝跡の埋没後は、遺構の分布が希薄になることから、この地につくられた施設の廃絶時期についても、大溝の埋没時期と同時期の可能性がある。

第II章 令和元年度の調査成果

1. 原遺跡（第12地点）

写真図版
1



原遺跡全景（北から）



原遺跡全景（西から）

1. 原遺跡（第12地点）

写真図版2



台風19号による冠水状況（北西から）



トレンチ全景（南東から）

第II章 令和元年度の調査成果

1. 原遺跡（第12地点）

写真図版 3



3トレンチ全景（東から）



SI01 竪穴建物跡（南西から）



SI01 竪穴建物跡カマド（南西から）



SD05 溝跡（西から）



SD04 溝跡（南東から）

1. 原遺跡（第12地点）

写真図版4



SD13 大溝跡（南東から）



SD13 大溝跡新段階 土師器臺出土状況（北東から）



SD05 溝跡 須恵器坏出土状況（南から）



4トレンチ全景（東から）



SI03 竪穴建物跡煙道部 土師器臺出土状況（南から）

第II章 令和元年度の調査成果

1. 原遺跡（第12地点）

写真図版 5



SI03 竪穴建物跡 須恵器壊出土状況（東から）



SI04 竪穴建物跡（南から）



5トレンチ全景（東から）



SI06 竪穴建物跡 土師器壊出土状況（北から）



SK04 土坑（南から）

1. 原遺跡（第12地点）

写真図版6



1. 須恵器・坏（第7図1）



2. 須恵器・坏（第12図1）



3. 土師器・坏（第7図4）



4. 土師器・小型壺（第14図1）



5. 土師器・壺（第7図1）



6. 土師器・壺（第12図6）

1. 原遺跡（第12地点）

写真図版 7



2. 鶴ヶ崎城跡（第20地点）

対象地は鶴ヶ崎城跡北縁に位置する。遺跡内では平成16年に3地点で発掘調査が実施されているほか、個人住宅新築工事に際して確認調査等が実施され、これまでに近世の掘立柱建物跡や区画溝等などの遺構のほか、17～19世紀後半にかけての遺物が出土している。

なお、協議対象地の現況は畠地であるが、江戸時代に描かれた古絵図を見ると、下中屋敷として描かれている。

平成31年2月27日付けで個人住宅建築に関する協議書が提出された。提出された工法は、現地表下約70cmまでの地盤改良（シート工法）を行うとあったが、これまで近隣で実施した調査では現地表面から約40cm下で遺構が確認できる状況であり、これらの成果を踏まえると対象地内に遺構・遺物が存在した場合、遺跡へ与える影響は大きいものと思われたことから、工事着手以前に確認調査を実施することになった。

調査は平成31年3月28日に開始した。まず建物建築予定範囲内に東西3m、南北2mのトレンチを設定し、重機を用いて現地表面下50cmほどで確認されたローム層（IV層）上面で掘削・精査したが、上層からの耕作痕が認められたのみで、遺構・遺物は確認できなかった。

以上の結果から土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日に埋戻しを行い、調査を終了した。



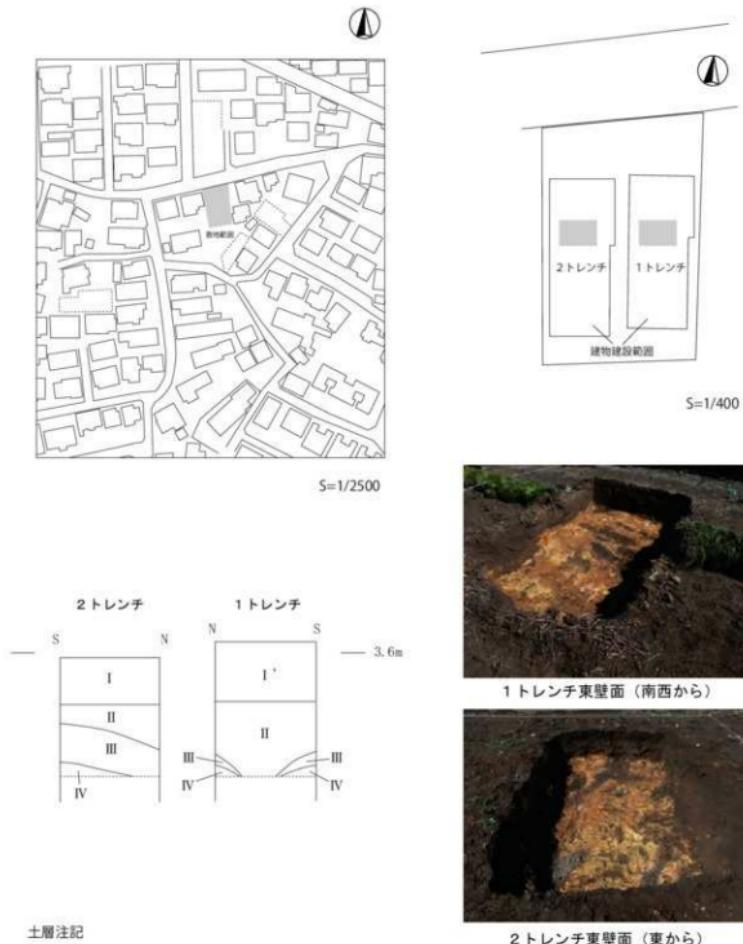
第16図 鶴ヶ崎城跡位置図



調査風景（南西から）

第II章 令和元年度の調査成果

2. 鶴ヶ崎城跡（第20地点）



土層注記

層No.	土色	土質	備考
I	黒褐色	10YR2/3	シルト 表土。しまりやや弱い。粘性弱い。耕作土。
I'	暗褐色	10YR3/3	シルト 碎石層。
II	褐灰色	10YR4/1	盛土層。しまりやや強い。粘性弱い。
III	暗褐色	10YR3/3	人頭大の礫多量含む。ガラス片混入。しまりやや強い。粘性やや強い。
IV	褐色	10YR4/4	ローム 暗褐色シルト小ブロックを少量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。

第17図 鶴ヶ崎城跡（第20地点）トレンチ配置図・基本土層柱状図

3. 台遺跡（第3地点）

対象地は台遺跡北西部に位置している。地形としては岩沼西部丘陵から東へ派生する小規模な尾根の緩斜面から低地にかけて立地する。対象地周辺では、これまで平成24年に市史編纂事業に伴う調査、平成29年の岩沼西部地区圃場整備事業に伴う調査が実施され、縄文土器、弥生土器、古墳時代前期の土師器、古代の土師器・須恵器などが出土している。

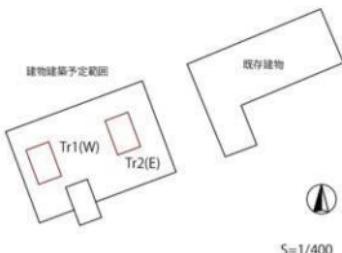
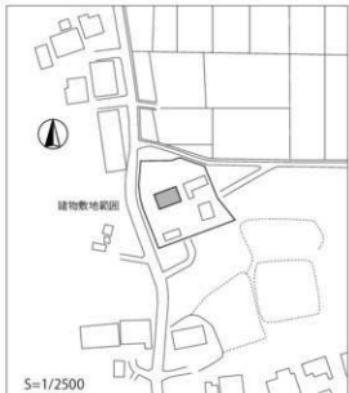
平成31年2月19日付けで個人住宅建築に関する協議書が提出された。提出された工事計画では、深さ約5mの柱状改良工事が予定されており、遺構・遺物が存在した場合には遺跡へ与える影響は大きいと考えられたことから、工事着手以前に確認調査を実施することとなった。

調査は令和元年5月22日に開始した。まず建物建築予定範囲内に東西2m、南北3mのトレンチを設定し、重機を用いて西トレンチでは現地表面下100cmほどで確認された暗オリーブ灰色砂質粘土層（V層）上面まで掘削し、遺構精査を行ったが、遺構はみられないことからさらに下層の堆積状況を確認するために一部で現地表下175cmまでの深堀を実施した。続いて東トレンチも重機を用いて現地表面下120cmほどで確認された黒色粘土層（VII層）上面まで掘削し、遺構精査を行ったが、遺構はみられないことからさらに下層の堆積状況を確認するために一部で現地表下193cmまでの深堀を実施した。なお、両トレンチではVII層中より大堀相馬・小野相馬の塊・皿・瓶類、岸窯系の擂鉢などの近世陶器小片が少量出土している。

以上の結果から土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日に埋戻しを行い、調査を終了した。



第18図 台遺跡位置図



第19図 台遺跡（第3地点）トレンチ配置図

第II章 令和元年度の調査成果

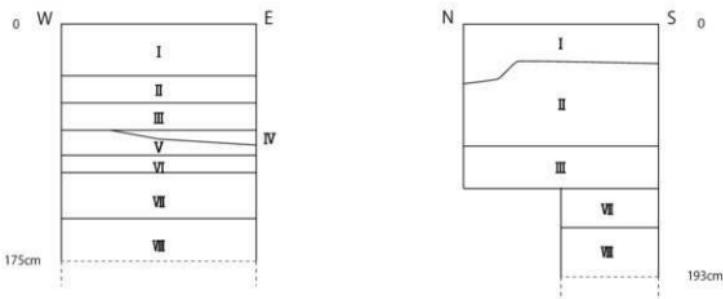
3. 台遺跡（第3地点）



西トレンチ



東トレンチ



層No.	土色	土質	備考
I	—	—	表土
II	黒褐色	10YR3/1	粘土 粘性あり。しまりなし。陶磁器片含む。
III	褐灰色	10YR4/1	粘土 粘性強い。しまりなし。マンガン・酸化鉄粒含む。
IV	黒褐色	2,5Y3/1	砂質粘土 粘性あり。しまりなし。ややグライ化。
V	暗オーラープ灰色	2,5GY3/1	粘土質砂 しまりあり。グライ化。
VI	黄灰色	2,5Y4/1	粘土 粘性あり。しまりあり。凝灰岩粒含む。
VII	黒色	10YR2/1	粘土 粘性あり。しまりなし。下層ほど泥炭化。
VIII	黒褐色	10YR3/2	泥炭質粘土 植物遺体多量に含む。

第20図 台遺跡（第3地点）基本土層柱状図

4. 丸山遺跡（第8地点）

対象地は丸山遺跡南縁に位置する。遺跡内では平成20・21年度に発掘調査が実施されているほか、個人住宅新築工事に際して確認調査等が実施され、これまでに中世の遺構・遺物、近世の屋敷地割に関連する溝跡・井戸跡などの遺構のほか、16～19世紀後半にかけての遺物が出土している。

なお、対象地は江戸時代に描かれた『岩沼要害屋敷絵図』などの古絵図を見ると、下中屋敷として描かれている。

平成31年4月10日付けで宅地造成工事に関する協議書が提出された。提出された工法は、宅地分譲予定地内での道路敷設、及び雨水樹設置を行うとあり、近隣の調査で確認されている遺構の広がりの把握が将来にわたって困難となることから、工事着手以前に確認調査を実施することになった。

調査は令和元年6月4日から開始した。まず対象地の東側に東西4m、南北3mの1トレンチを設定し、重機を用いて現地表面下80cmほどで確認された暗褐色粘土層(IV層)上面まで掘削し、遺構精査を行った。その結果、ピット2穴を確認し、半蔵・土層断面図の作成、写真撮影等を実施した。なお、南壁際で確認したピット1の土層観察の結果、ピットはIII層から掘り込まれていることが判明した。ピット内からの遺物の出土は認められていないが、耕作土であるIII層掘削時には大堀相馬産の陶器小壺、肥前産磁器の染付碗、在地産と考えられる鉢鉢が出土していることから、1トレンチで確認できた2つのピットは近世以降の年代が考えられる。

2トレンチは1トレンチの約8m西側で、東西約9m、南北2mの規模で設定した。しかしながら、表土掘削時に北側では既存住宅へと至る水道管の存在が判明したことから、これを避けるために南北は1.6mの幅に縮小して掘り下げを実施した。重機を用いて現地表面下40cmほどで確認された暗褐色粘土層(IV層)上面まで掘削し、遺構精査を行ったところ、井戸跡、土坑、溝跡を確認している。

SE01

2トレンチ西側で確認した。確認できた範囲での幅は2.2mを測る。SK01と重複し、これより古い。深さは確認面より1.2mまで掘り下げを行ったが、湧水が激しく壁面崩落の恐れが生じたことからこれより以下の掘り下げは断念した。覆土は4層確認でき、すべて人為的堆積である。遺物はいずれも小片のため図示はできないが、肥前産磁器の染付碗・皿・小壺・瓶類、大堀相馬産陶器の壺・土瓶・土瓶蓋・瓶類、小野相馬産陶器壺、堤焼と考えられる陶器瓶類、土師質土器皿、土製品の泥面子などが出土しており、19世紀中頃の遺構と考えられる。

SK01

2トレンチ西側で確認した。確認できた範囲での幅は3.2mを測る。SE01と重複し、これより新しい。確認面からの深さは0.6mで、覆土は3層確認でき、すべて人為的堆積である。遺物は出土していないが、SE01やIII層の年代観から19世紀後半頃と考えられる。

SD01

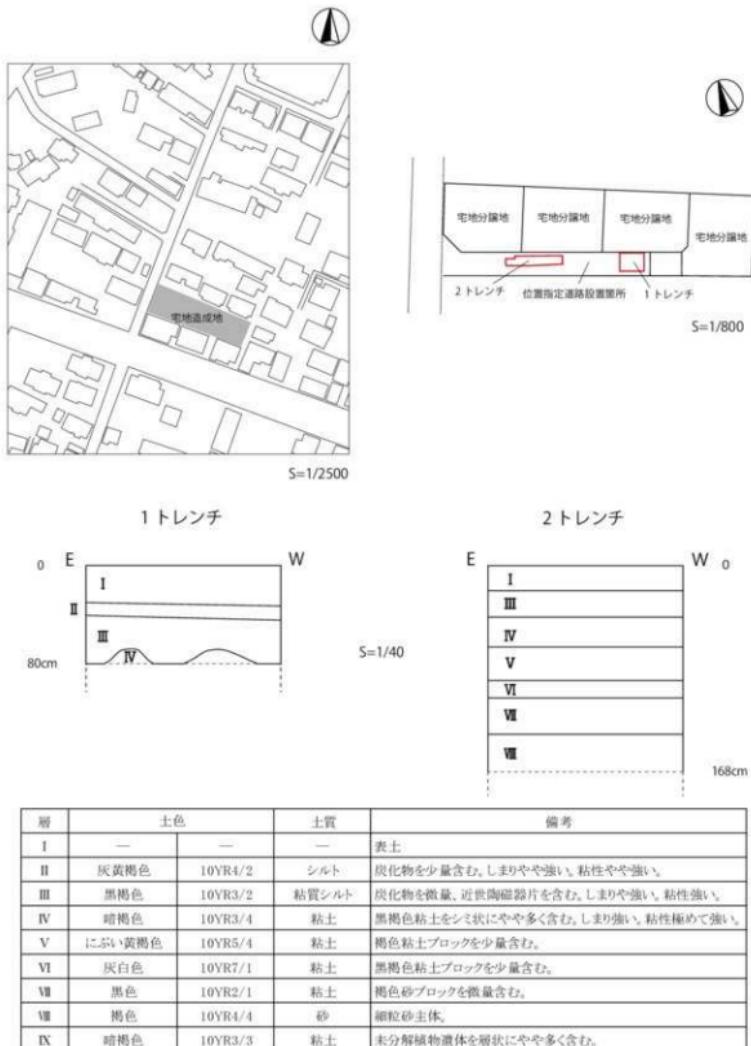
2トレンチ東側で確認した南北溝である。確認できた範囲での幅は1.0mを測り、確認面からの



図21 丸山遺跡（第8地点）位置図

第II章 令和元年度の調査成果

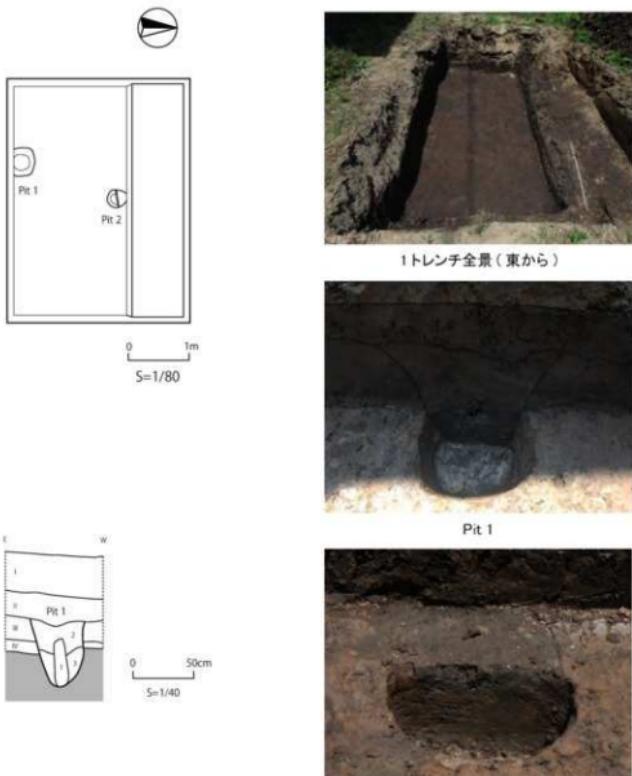
4. 丸山遺跡（第8地点）



第22図 丸山遺跡（第8地点）トレンチ配置図・基本土層柱状図

深さは0.4mである。覆土は6層確認でき、1・2層が人為的堆積、3～6層が自然堆積である。遺物は石製品の仕上砥と考えられる砥石が出土したのみであるが、III層に覆われていることから近世遺構と考えられる。

4. 丸山遺跡（第8地点）



Pit1 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	10YR2/2	シルト 柱痕跡。しまり弱い。粘性やや強い。
2	暗褐色	10YR3/3	炭化物をやや多く含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
3	黒褐色	10YR2/2	III層ブロックを少量含む。しまりやや強い。粘性やや弱い。

Pit2 土層注記

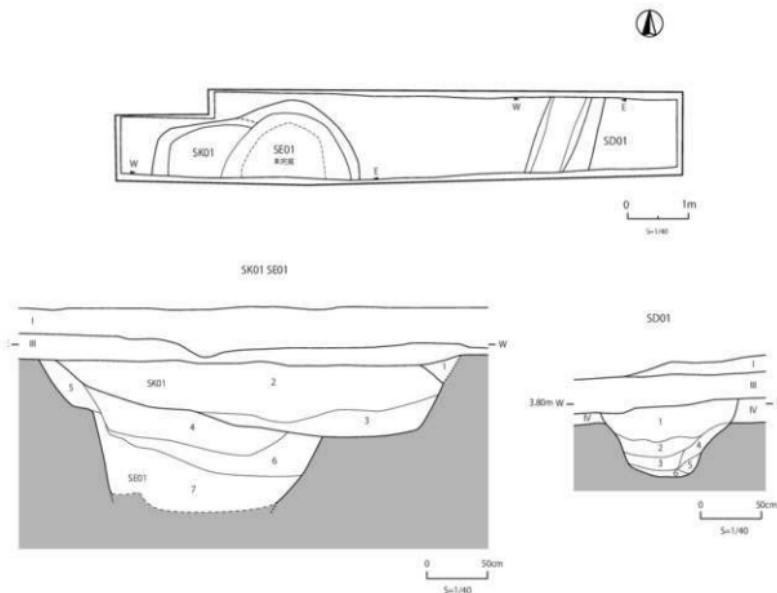
層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR3/3	炭化物をやや多く含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。

第23図 1トレ平面図・Pit1断面図

以上の結果から遺構記録作業、土層記録作業、写真撮影を実施した後、6月5日に埋戻しを行い、調査を終了した。

第II章 令和元年度の調査成果

4. 丸山遺跡（第8地点）



層	土色	土質	備考
1	黒色	7.5YR2/1	粘質シルト 黄褐色粘土、炭化物を粒状に微量含む。しまりやや強い。
2	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト 黄褐色、白色粘土を小ブロック状にやや多く含む。燒土、炭化物を小ブロック状に下位にやや多く含む。しまり強い。
3	黒褐色	7.5YR3/1	粘土 黄褐色、白色粘土を小ブロック状に少量含む。しまり強い。
4	黒褐色	7.5YR3/1	粘土 黄褐色、白色粘土を小ブロック状にやや多く含む。しまり強い。
5	黒褐色	10YR3/1	粘土 黄褐色、白色粘土を小・中ブロック状にやや多く含む。しまり強い。
6	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト 暗褐色を小ブロック状に少量含む。しまりやや強い。

層	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト IV層を粒状に少量、炭化物を微量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト V層及びVI層をブロック状にやや多く含む。下面に炭化物の薄層あり。しまりやや強い。粘性やや弱い。SK01
3	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト VI層を粒状に少量含む。SK01
4	黒褐色	7.5YR3/1	シルト VI層をブロック状に少量含む。しまりやや強い。粘性やや弱い。SE01
5	黒褐色	10YR2/2	シルト IV層を粒状に微量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。SE01
6	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト V層を粒状に多量、炭化物を微量含む。しまり強い。粘性極めて強い。SE01
7	暗褐色	10YR3/3	粘土 IV, V, VI層を中ブロック状に多量、マンガンを少量含む。しまりやや強い。粘性極めて強い。SE01

第24図 2トレ平面図・SD1、SK01、SE01断面図

5. 原遺跡（第9地点）

対象地は原遺跡の北隣に位置している。地形的には阿武隈川の旧河道に立地していると考えられる。対象地が位置する原遺跡内では平成17年度の下水道工事の際に土師器片・須恵器片が発見され、また部分的に溝状遺構と思われる遺構も確認されている。また平成28～30年度に実施している調査では、掘立柱建物跡・材木堆・竪穴建物跡などの遺構・須恵器円面鏡などの遺物が発見されているが、これら官衙的な様相を呈する遺構・遺物は『延喜式』に記載される「玉前駅家」、あるいは多賀城跡より出土した木簡に記される「玉前割」に係わる可能性が高い。なお、今回の協議対象地の旧地形は、官衙的な遺構や竪穴建物跡が発見された地点からは約1m近く低い場所である。



図25 原遺跡（第9地点）位置図

令和元年6月14日付けでライスセンター建設に関する協議書が提出された。対象地の現況は畠地であるが、前述のようにかつては遺構が確認された地点より低く、平成29年度に旧田面上に1.5mほどの客土を盛土してつくられたものである。しかしながら、提出された計画は、現地表下7.5mまでの地盤改良工事を行うものであり、遺構・遺物が存在した場合には遺跡へ与える影響は大きいものと思われたことから、事前に確認調査を実施することとなった。

調査は令和元年7月18日に開始した。建物建築予定範囲内の西側には東西2m、南北2mの西トレントンチ、東側には東西2m、南北3mの東トレントンチを設定した。その後、重機を用いて西トレントンチでは現地表面下170cm、東トレントンチでは現地表面下160cmほどで確認された暗褐色粘質シルト層（III層）上面まで掘削し、遺構精査を行った。調査の結果、東側トレントンチでは遺構・遺物とも確認されなかつたが、西側トレントンチではトレントンチ南東から北西へ緩やかな弧状を呈する、深さ5cmほどの浅い溝跡が1条確認されている。遺物は盛土層中より土師器もしくは赤焼土器と考えられる磨滅が顕著な坏が出士している。

以上の結果から遺構記録作業、土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日中に埋戻しを行い、調査を終了した。



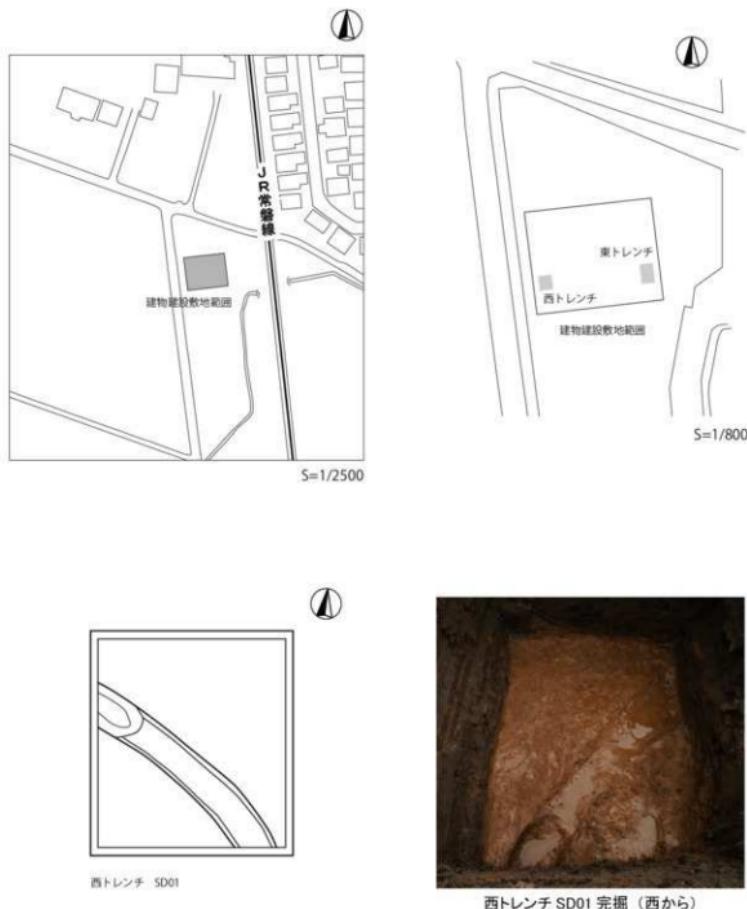
東トレントンチ作業風景



西トレントンチ作業風景

第II章 令和元年度の調査成果

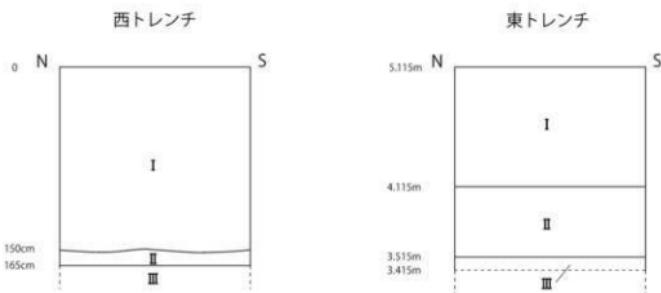
5. 原遺跡（第9地点）



西トレンチ SD01 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	灰黄褐色	10YR4/2 粘質シルト	酸化鉄小ブロックをやや多く含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。

第26図 原遺跡（第9地点）基本土層柱状図



東トレンチ注記

層No.	土色	土質	備考
I	黒褐色	10YR2/1 粘土	灰白色粘土大ブロックをやや多く含む。しまり強い。粘性強い。
II	にぶい黄褐色	10YR4/3 粘質シルト	黒褐色大ブロックを少量、褐色粘土中ブロックをやや多く含む。しまりやや弱い。粘性強い。
III	暗褐色	10YR3/3 粘質シルト	酸化鉄をやや多く含む。しまりやや強い。粘性強い。

西トレンチ注記

層No.	土色	土質	備考
I	黒褐色	10YR3/2 粘土	黒褐色粘土大-小ブロックをやや多く、褐色、褐灰色小ブロックを少量含む。しまり強い。粘性極めて強い。
II	褐色	10YR5/1 粘質シルト	褐色粘土中ブロックをやや多く含む。酸化鉄を少量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
III	にぶい黄褐色	10YR4/3 砂質シルト	酸化鉄をやや多く含む。しまりやや強い。粘性やや弱い。

第27図 トレンチ配置図

第II章 令和元年度の調査成果

6. 原遺跡（第10地点）

6. 原遺跡（第10地点）

対象地は原遺跡の南西部に位置している。地形的には阿武隈川によって形成された自然堤防上に立地している。対象地の地目は宅地であり、現況は既存住宅を撤去した更地となっていたが、現地調査の際には遺物の表探はできなかった。

令和元年6月14日付けで個人住宅建築に関する協議書が提出された。提出された計画では現地表下40cmほどの掘削を行うベタ基礎工法とあったが、浄化槽を設置する箇所では幅2m、掘削深度も2mの工事が予定されたことから、遺構・遺物が存在していた場合には遺跡へ与える影響が懸念された。このため、浄化槽の設置部分については確認調査を実施することにした。なお、対象地では協議書提出以前に既存住宅の解体工事を行ったことにより、基礎の撤去がどの深度まで及んでいたのかを確認する必要性が生じたことから、併せて既存住宅が存在していた箇所でも確認のための調査を実施することになった。

調査は令和元年7月23日に開始した。浄化槽設置箇所に設定した1トレンチは、隣接した箇所にブロック隙が存在していることを考慮して、東西2m、南北1mの規模とした。当初は重機を用いて現地表下1.2mで確認されたにぶい黄褐色砂質シルト層（IV層）上面まで掘削し、遺構精査を行った。その結果、長軸20cm、短軸14cmの小ピットが確認された。なお、IV層以下の土層堆積状況を確認するため、トレンチ北東隅で深堀を実施した。

既存住宅基礎撤去深度を確認するために設置した2トレンチは、東西1m、南北4mの規模とした。基礎撤去深度は現地表下50cmほどで留まっていたが、さらに下層の状況を確認するため部分的に現地表下103cmまで掘削を実施し、III層とした暗褐色粘質シルト上面で遺構精査を行ったが、遺構は確認できなかった。

遺物は1・2トレンチとも掘削時に土師器の壺・甕、須恵器の甕・蓋などが出土しているが、いずれも小片のために図示は不可能である。

以上の結果から遺構記録作業、土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日中に埋戻しを行い、調査を終了した。



第28図 原遺跡（第10地点）位置図

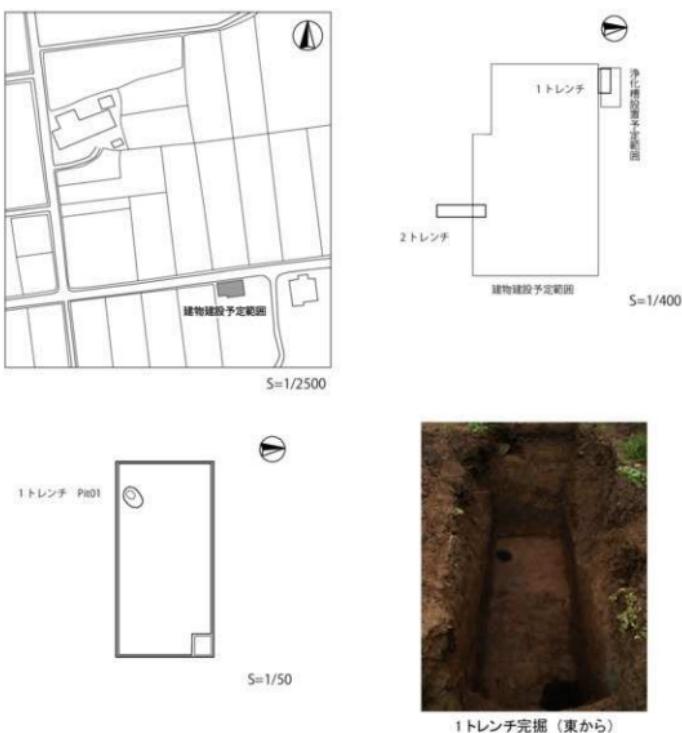


1トレンチ作業風景



2トレンチ作業風景

6. 原遺跡（第10地点）



1 レンチ Pit01 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	10YR3/2 粘質シルト	に多い黄褐色砂質シルト小ブロックを微量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。

第29図 原遺跡（第10地点）レンチ配置図

第II章 令和元年度の調査成果

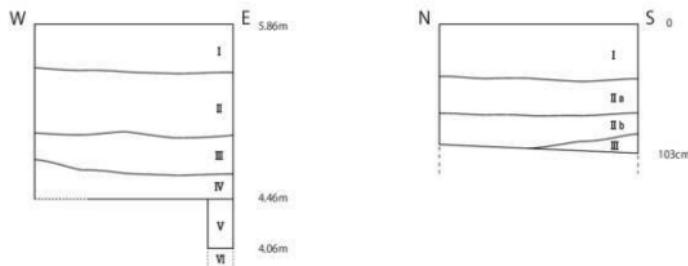
6. 原遺跡（第10地点）



1 レンチ(北側)



2 レンチ(南側)



1 レンチ土層注記

層No.	土色	土質	備考
I	暗褐色	10YR3/3 砂質シルト	しまり弱い。粘性やや弱い。表土
II	にぶい黄褐色	10YR4/3 砂	細粒砂。炭化物粒を微量含む。暗褐色粘土質シルト小ブロックを少量含む。しまり強い。粘性弱い。
III	黒褐色	10YR3/2 粘質シルト	炭化物粒含む。古代遺物片含む。しまりやや弱い。粘性やや強い。遺物包含層。
IV	にぶい黄褐色	10YR4/3 砂質シルト	褐色粘土小ブロックを微量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。遺構確認面。
V	黒色	10YR2/1 粘土	褐色粘土小ブロックを微量含む。しまり強い。粘性極めて強い。
VI	褐色	10YR4/4 粘土	しまり強い。粘性強い。

2 レンチ注記

層No.	土色	土質	備考
I	暗褐色	10YR3/3 砂質シルト	しまり弱い。粘性やや弱い。表土
IIa	にぶい黄褐色	10YR4/3 砂	細粒砂。炭化物粒を微量含む。しまり強い。粘性なし。
IIb	にぶい黄褐色	10YR4/3 砂	細粒砂。炭化物粒を微量含む。暗褐色粘土質シルト小ブロックを少量含む。しまり強い。粘性弱い。
III	暗褐色	10YR3/3 粘質シルト	炭化物粒を少量含む。しまりやや弱い。粘性やや強い。

第30図 原遺跡（第10地点）基本土層柱状図

7. 鶴ヶ崎城跡（第21地点）

対象地は鶴ヶ崎城跡の北側に隣接する。遺跡内では平成16年に3地点で発掘調査が実施されているほか、平成30年度にも対象地南側で個人住宅新築工事に際して第18地点の確認調査等が実施されている（岩沼市教育委員会2019）。遺跡内ではこれまでに中世の遺構・遺物、近世の区画構等などの遺構のほか、17～19世紀後半にかけての遺物が出土している。なお協議対象地は、江戸時代に描かれた古絵図を見ると、下中屋敷として描かれている。

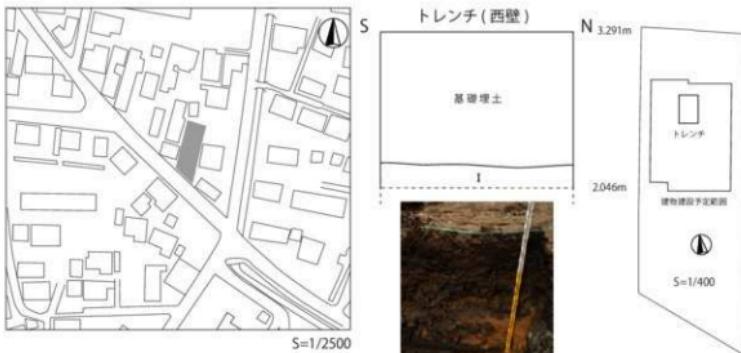
令和元年6月20日付けで個人住宅建築に関する協議書が提出された。提出された工法は、現地表下8mの柱状改良工事を行うとあり、前述の第18地点での調査成果を考慮すると遺構・遺物が存在した場合、遺跡へ与える影響は大きいものと考えられた。このため、工事着手以前に確認調査を実施することとなった。

調査は令和元年8月8日に開始した。建物建築予定範囲内に東西2m、南北3mのトレーニングを設定した後、重機を用いて表土掘削を行った。現地表面から110cm下まで掘削し、I層とした暗褐色土層上面で遺構精査を実施したが、遺構・遺物は確認できなかった。

土層記録作業、写真撮影後に下位の土層堆積状況等の確認を実施しようとしたが、前日の降雨によって湧水が激しく、また調査区壁面崩落の危険性が非常に高くなつたことから、調査の継続は断念し、埋戻しを行い、調査を終了した。



第31図 鶴ヶ崎城跡（第21地点）位置図



層No.	土色	土質	備考
I	暗褐色	10YR3/3	粘土 青灰色の凝灰岩小塊をやや多く、にぶい黄褐色粘質シルト大ブロックを少量含む。しまり弱い、粘性やや強い。

第32図 鶴ヶ崎城跡（第21地点）トレーニング配置図・基本土層柱状図

8. 原遺跡（第11地点）

8. 原遺跡（第11地点）

対象地は原遺跡の中央西側寄りに位置している。地形的には阿武隈川によって形成された自然堤防上に立地している。対象地の地目は畑地であったが、現地調査の際には遺物の表探はできなかった。

令和元年7月24日付で個人住宅建築に関する発掘届が提出された。対象地では25cmの盛土を行ったうえでベタ基礎による住宅が建築されていたが、浄化槽を設置する箇所では幅2m、掘削深度も2mの工事が予定されたことから、遺構・遺物が存在していた場合には遺跡へ与える影響が懸念された。このため、浄化槽の設置部分については確認調査を実施することにした。

調査は令和元年8月9日に開始した。設定したレンチは東西0.7m、南北1.5mの規模とした。当初は重機を用いて現地表下1.1mで確認された黒色粘質シルト層（II層）上面まで掘削し、遺構精査を行ったが、遺構覆土が極めて不明瞭であったことから20cm下の褐色粘土層（III層）上面まで人力で掘り下げ、再度遺構精査を実施した。その結果、確認できた最大幅で65cmを測り、径15cmほどの円形の柱痕跡を有する柱穴跡1基が確認された。東壁で土層観察を行ったところ、この柱穴掘方跡はII層上面からの掘り込みであり、深さは80cmを測る。また、柱穴掘方内の堆積土は2層に分層でき、縮まりは極めて強い。柱痕跡は柱穴の南西隅で確認され、掘方底面より10cmほど沈降していた。なお、柱穴掘方内からは非クロ成形の土師器甕が出土している。

今回の調査で発見した柱穴跡の規模は、近接する第3次調査（第8地点）で確認された官衙的な建物を構成する柱穴跡と比べても遜色ない規模であることから、官衙的な遺構群がさらに西側へ広がることが確実となり、極めて大きな成果となった。

このほか小片のため図示是不可能であるが、表土掘削時や工事立会時には非クロ成形の土師器甕のほか、瀬戸美濃産や大堀相馬産、岸窯系と考えられる陶器片、肥前系の染付や平清水産と考えられる白磁片が出土している。

以上の結果から遺構記録作業、土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日中に埋戻しを行い、調査を終了した。

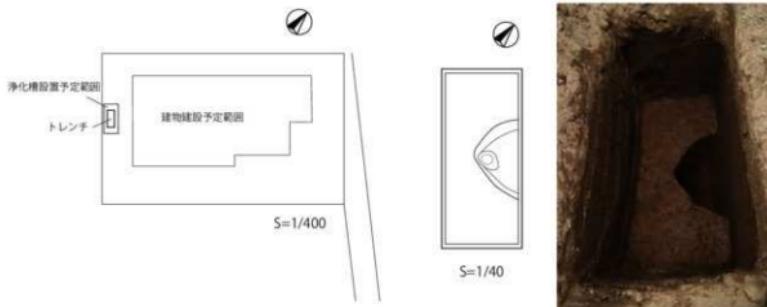


第33図 原遺跡（第11地点）位置図



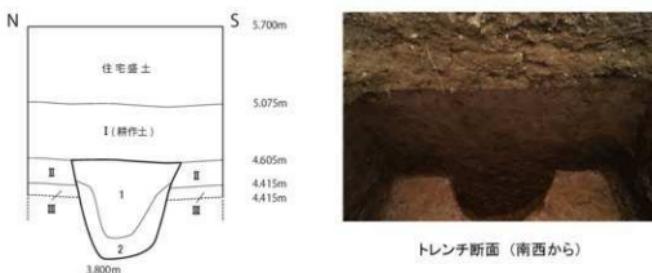
第34図 周辺地図

8. 原遺跡（第11地点）



トレンチ完掘（南東から）

トレンチ（東壁面）



トレンチ断面（南西から）

土層注記

層No.	土色		土質	備考
I	暗褐色	10YR3/3	シルト	炭化物を微量含む。しまり弱い。粘性やや強い。
II	黒色	10YR2/1	粘質シルト	褐色粘土粒を微量含む。しまり強い。粘性強い。
III	褐色	10YR4/4	粘土	黒色シルト粒を微量含む。しまり強い。粘性強い。
1	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	褐色粘土小ブロックをやや多く含む。しまりやや弱い。粘性やや強い。
2	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	褐色粘土小ブロックを多量含む。しまり強い。粘性やや強い。

第35図 原遺跡（第11地点）トレンチ配置図・基本土層柱状図

9. 丸山遺跡（第9地点）

9. 丸山遺跡（第9地点）

対象地は丸山遺跡北西部に位置する。遺跡内では平成20・21年度に発掘調査が実施されているほか、個人住宅新築工事に際して確認調査等が実施され、これまでに中世の遺構・遺物、近世の屋敷地割に関連する溝跡・井戸跡などの遺構のほか、16～19世紀後半にかけての遺物が出土している。

なお、対象地は、江戸時代に描かれた『岩沼要害屋敷絵図』などの古絵図を見ると、要害の周囲をめぐる堀付近と想定される。

令和元年7月11日付けで集合住宅建築に関する協議書が提出された。提出された工法は、地表面から400cmほどの柱状改良工事を行うとあり、対象地内に遺構・遺物が存在した場合、遺跡へ与える影響は大きいと考えられたことから事前に確認調査を実施することとなった。

調査は令和元年8月27日に開始した。建物建築予定範囲内に東西6m、南北2mのトレンチを設定した。その後、重機を用いて現地表面下60cmほどで確認された黒褐色粘質シルト層（VII層）上面まで掘削し、遺構精査を行った。調査の結果、東側では遺構・遺物とも確認されなかつたが、西側ではにぶい黄褐色シルトや暗褐色シルトが堆積していることが確認された。これらは絵図でみられる堀の埋土の可能性が考えられることから、トレンチ中央から西側の一部さらに掘り下げを行い、堆積状況の確認を行った。その結果、自然堆積層であるVII層は傾斜角30°ほどと、緩やかに傾斜していることが確認され、その西側では人為的に埋め戻されている状況が認められた。これらのことから、このVII層の傾斜は堀の立ち上がりであると考えられ、現在の地形に要害の範囲の復元をする際の指標となつた。なお、調査では遺物は出土していない。

以上の結果から遺構記録作業、土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日中に埋戻しを行い、調査を終了した。



第36図 丸山遺跡（第9地点）位置図



第37図 『岩沼要害屋敷絵図』（宮城県図書館所蔵）から推定される丸山遺跡（第9地点）の位置



土層注記

層No.	土色	土質	備考
I	暗褐色	10YR3/3	シルト
II	にぶい黄褐色	10YR5/3	暗褐色シルトブロックを多量含む。
III	暗褐色	10YR3/3	黒褐色シルトブロックを少量、炭化物を微量含む。
IV	褐色	10YR4/1	マンガンを多量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
V	黒色	10YR2/1	白色粘土大ブロック、褐色粘土中ブロックを多量含む。しまりやや弱い。粘性強い。
VI	にぶい黄褐色	10YR4/3	黒色粘土小ブロックを少量、炭化物を微量含む。しまり強い。粘性強い。
VII	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト しまりやや弱い。粘性強い。均質な土壤。

第38図 丸山遺跡（第9地点）トレンチ配置図・基本土層柱状図

10. 二木横穴墓群隣接地

10. 二木横穴墓群隣接地

対象地は二木横穴墓群の西側に隣接している。遺跡内では昭和37、49年の宅地造成工事に際して発掘調査が実施され、これまで14基の横穴墓が調査されている。中でも昭和37年の調査では、多数の遺物や人骨などが出土しており、当時は大きな注目を集めていた。

令和元年9月10日付けで既存店舗の解体及び新店舗の建築に関する協議書が提出された。提出された工法は、地表面から400cmほどの柱状改良工事を行うとあり、対象敷地内で墓前祭祀等の行為が仮に行われていた場合、遺跡へ与える影響は大きいと考えられた。また横穴墓が存在する斜面に近接して、崩落防止のための擁壁の設置も計画されたことから、事前に確認調査を実施することとなった。

調査は令和元年10月3日に開始した擁壁設置箇所に設定した1トレンチは、隣接した箇所に横穴墓が存在している場所を選定し、東西2m、南北3mの規模とした。重機を用いて現地表下1.0mで確認された灰オリーブ色粘質シルト層（Ⅲ層）上面まで掘削し、遺構精査を行った。しかしながら、東側では傾斜角45°の崖根部がみられたものの、遺構・遺物はみられなかった。

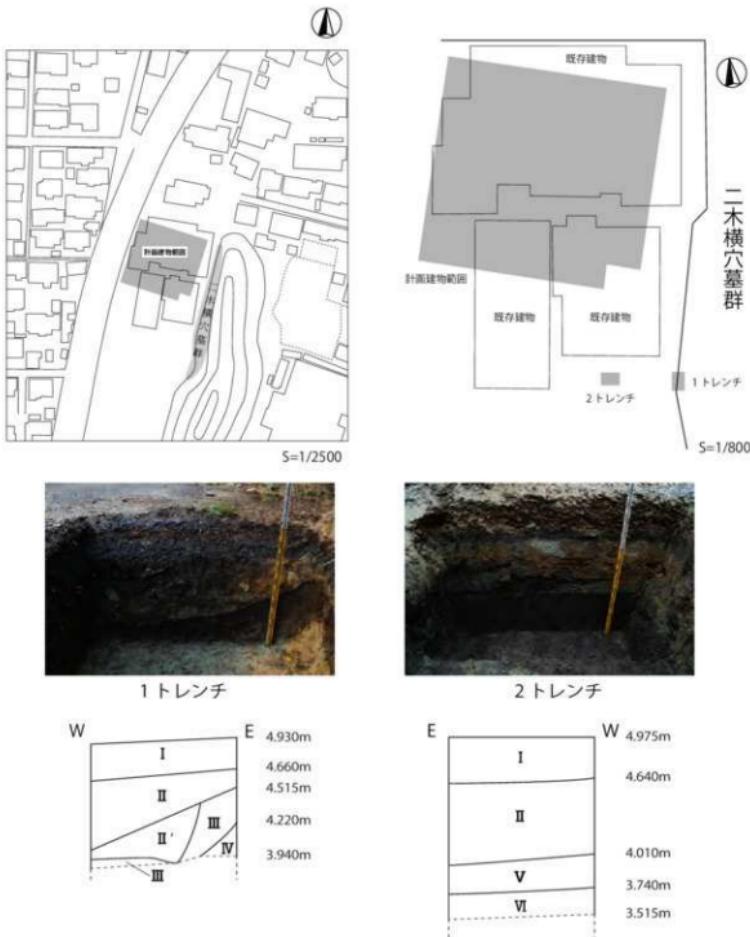
敷地内に遺構・遺物の有無を確認するために設置した2トレンチは、東西3m、南北2mの規模とした。駐車場の碎石を除去した下からは現代遺物を多量に含む擾乱層が60cmほどの厚さで堆積していた。これらを除去した現地表下95cmまで掘削して検出した黒色シルト層（V層）上面で遺構精査を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。その後、さらに下位の土層堆積状況を把握するために一部で現地表下140cmほどまで掘り下げを行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。さらに湧水が激しくなったことからこれより下位の調査は断念し、両トレンチで土層記録作業、写真撮影を実施した後、埋戻しを行い、調査を終了した。



第39図 二木横穴墓群隣接地位置図



二木横穴墓群の現況



基本土層注記

層No.	土色	土質	備考
I	—	—	碎石 駐車場に散かれている碎石層。
II	黒色	10YR2/1	粘質シルト カクラン。現代遺物を多量含む。
II'	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト カクラン。現代遺物を少量、凝灰岩ブロックを多量含む。
III	灰オーブー色	5Y4/2	粘質シルト マンガニを少量含む。しまりやや弱い、粘性やや強い。
IV	—	—	凝灰岩 岩盤層。
V	黒色	10YR2/1	シルト しまりやや弱い、粘性やや強い。
VI	黒色	10YR2/1	粘質シルト しまり強い、粘性極めて強い。

第40図 二木横穴墓群隣接地トレンチ配置図・基本土層柱状図

11. 下野郷館跡（第30地点）

11. 下野郷館跡（第30地点）

対象地は下野郷館跡の中央付近に位置する。地質学的には自然堤防、もしくは海岸砂丘、及び堤間湿地に立地する。周辺では平成12～15年にかけての県道亘理塩釜線改良工事、平成24～29年にかけて河川改修工事に伴う発掘調査、個人住宅新築工事に際して多数の確認調査等が実施され、これまでに古墳時代、古代、中世の遺構や遺物、近世の屋敷跡・区画溝、井戸などの遺構のほか、17～19世紀後半にかけての遺物が出土している。

令和元年8月14日付けで個人住宅建築に関する協議書が提出された。提出された工法は、現地表面から70cm下まで表層改良を行うとあったが、対象地の西側で平成29年度に調査を実施した地点の成果を踏まえると、古墳時代中期の遺物、中世～近世の遺構・遺物が今回の対象地内においても現存している可能性が考慮できることから、工事着手以前に確認調査を実施することとなった。

調査は令和元年10月5日に開始した。建物建築予定範囲内に東西2m、南北3mのトレーナーを設定した後、重機を用いて表土掘削を行った。現地表面から80cm下まで掘削し、V層とした褐色シルト層上面で遺構精査を実施したが、遺構は確認できなかった。なお、小片のため図示は不可能であるが、III層掘り下げ時には大堀相馬産の塊・土瓶片、種別不明の土器片が出土している。

以上の結果から土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日中に埋戻しを行い、調査を終了した。

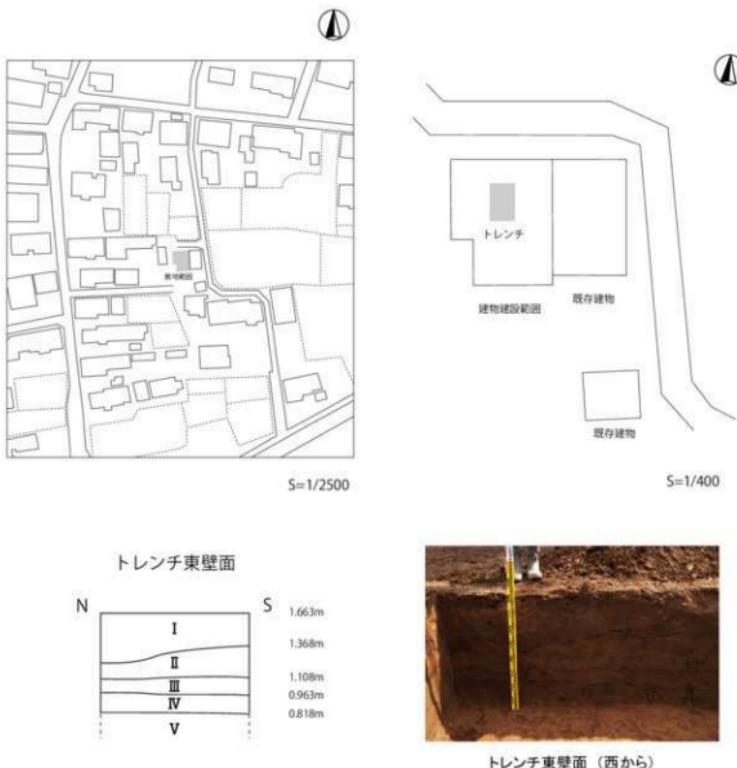


第41図 下野郷館跡（第30地点）位置図



第42図 下野郷館跡内の調査箇所

11. 下野郷館跡（第30地点）



第43図 下野郷館跡トレンチ配置図・基本土層柱状図

12. 上根崎遺跡（第4地点）

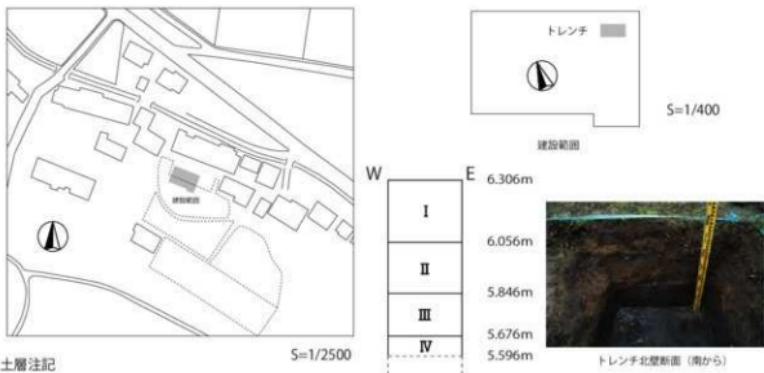
12. 上根崎遺跡（第4地点）

対象地は、上根崎遺跡内に位置している。地形としては丘陵裾部に立地する。対象地周辺では、平成23年度に県道改良事業に際して発掘調査を実施しており、溝跡、土坑、柱穴跡などの遺構や縄文土器、中世陶器、近世陶器などの遺物を発見している。また個人住宅建築に際して実施している調査では、遺構は見られないものの、縄文土器や土師器が出土している。

令和元年9月13日付けで個人住宅建築に関する協議書が提出された。提出された工事計画では、現地表面から7.2m下までパイル設置を行うとあり、対象地内で遺構・遺物が存在した場合には遺跡へ与える影響は大きいものと考えられることから、事前に確認調査を実施することとなった。

調査は令和元年10月24日に開始した。調査時には対象地内への重機の搬入が不可能であったことから、建物建築予定範囲内に東西2m、南北1mのトレーナーを設定した後、人力で表土掘削を行った。対象地では畑を作る際に盛土を行っており、現地表面から50cm下までが盛土であった。その後IV層としたオリーブ黒色粘質シルト層上面で遺構精査を実施したが、遺構・遺物は確認できなかった。

以上の結果から土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日中に埋戻しを行い、調査を終了した。



第45図 上根崎遺跡（第4地点）トレーナー配置図・基本土層柱状図

13. 原遺跡（第14地点）

対象地は原遺跡の東縁に位置している。地形的には阿武隈川によって形成された自然堤防上に立地していると考えられる。対象地が位置する原遺跡の東側では平成17年度の下水道工事の際に土師器片・須恵器片が発見され、また部分的に溝状遺構と思われる遺構も確認されている。しかしながら、遺跡の東縁付近でこれまで実施している集合住宅建築に伴う調査では、遺構・遺物は発見されておらず、遺構・遺物の広がりの把握が課題となっている地区である。

令和元年10月4日付けで建売住宅建築に関する協議書が提出された。提出された計画は、現地表下3.0mまでの地盤改良工事を行うものである。前述のとおり対象地の隣接地では土師器片が出土していることから、遺構・遺物が含まれている可能性が考えられ、事前に確認調査を実施することになった。

調査は令和元年11月19日に開始した。建物建築予定範囲内に東西3m、南北2mのトレーナーを4箇所設定した後、重機を用いて表土掘削を行った。その結果、全体で1.5~1.7mの盛土が確認され、その下方で旧水田耕作土であるI層が確認された。遺構確認はIII層上面で実施しているが、すべてのトレーナーにおいて遺構・遺物とも確認されてない。なお、III層の検出標高でみると3トレーナーがかなり低いことから、旧地形は対象地の北東側へ向かって傾斜していることが明らかとなった。

以上の結果から土層記録作業、写真撮影を実施した後、翌11月20日に埋戻しを行い、調査を終了した。



第46図 原遺跡（第14地点）位置図



1トレーナー北壁土層断面



2トレーナー北壁土層断面

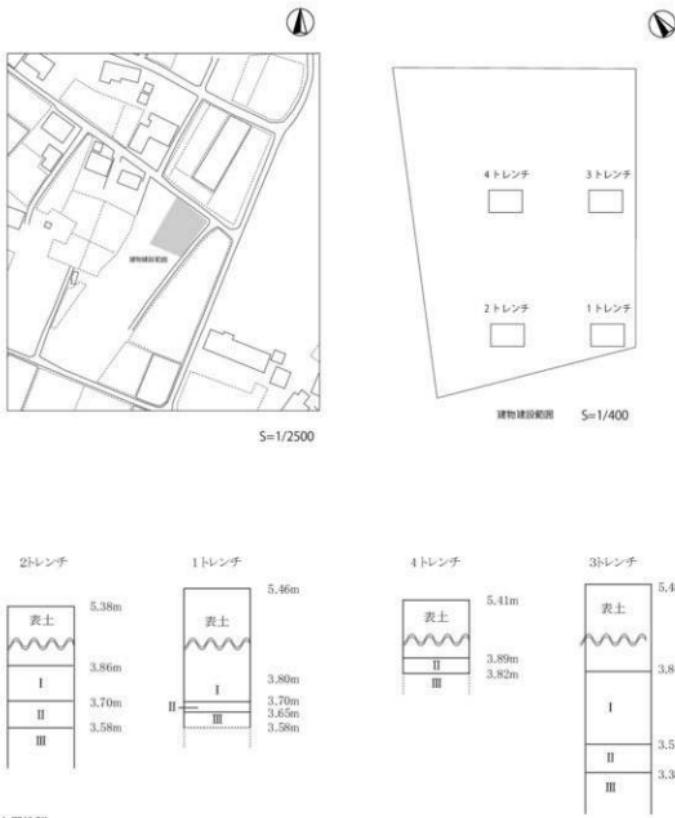


3トレーナー北壁土層断面



4トレーナー北壁土層断面

13. 原遺跡（第14地点）



土層注記

層No.	土色	土質	備考
I	にぶい黄褐色	10YR4/3 シルト	マンガンを多量。暗褐色粘土小ブロックをやや多く含む。しまりやや強い、粘性やや弱い、砂利を微量含む水田耕作土。
II	褐色	10YR4/4 粘質シルト	しまりやや弱い、粘性やや強い
III	灰黃褐色	10YR4/2 粘質シルト	II層を小ブロック状に少量含む。しまりやや弱い、粘性やや強い。

第47図 原遺跡（第14地点）トレンチ配置図・基本土層柱状図

【引用・参考文献】

- 伊東 信雄 1957 「弥生式文化時代」『宮城県史』 1
- 岩沼市史編纂委員会 1984 『岩沼市史』 岩沼市
- 岩沼市教育委員会 2000 『引札櫛穴墓群』 岩沼市文化財調査報告書第1集
- 岩沼市教育委員会 2004a 『下野郡領跡』 岩沼市文化財調査報告書第2集
- 岩沼市教育委員会 2004b 『鶴ヶ崎城跡・第2地点』 岩沼市文化財調査報告書第3集
- 岩沼市教育委員会 2004c 『鶴ヶ崎城跡・第3地点』 岩沼市文化財調査報告書第4集
- 岩沼市教育委員会 2005 『鶴ヶ崎城跡・第4地点』 岩沼市文化財調査報告書第6集
- 岩沼市教育委員会 2007 『朝日古墳群』 岩沼市文化財調査報告書第7集
- 岩沼市教育委員会 2009 『竹駒神社境内遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第8集
- 岩沼市教育委員会 2010 『丸山遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第9集
- 岩沼市教育委員会 2011 『西須賀原遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第10集
- 岩沼市教育委員会 2012 『上根崎遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第11集
- 岩沼市教育委員会 2016a 『東日本大震災復興開闢埋蔵文化財調査報告書III』 岩沼市文化財調査報告書第14集
- 岩沼市教育委員会 2016b 『東日本大震災復興開闢埋蔵文化財調査報告書IV』 岩沼市文化財調査報告書第15集
- 岩沼市教育委員会 2016c 『高大廻遺跡・にら塚遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第16集
- 岩沼市教育委員会 2017a 「岩沼市・原遺跡の調査概要」『第43回古代城柵官道跡検討会資料集』
- 岩沼市教育委員会 2017b 『貞山福発掘調査報告書』 岩沼市文化財調査報告書第17集
- 岩沼市教育委員会 2017c 『東日本大震災復興開闢埋蔵文化財調査報告書V』 岩沼市文化財調査報告書第18集
- 岩沼市教育委員会 2018 a 『原遺跡第2次調査概要報告書』 岩沼市文化財調査報告書第19集
- 岩沼市教育委員会 2018 b 『下野郷船跡』 岩沼市文化財調査報告書第20集
- 岩沼市教育委員会 2018 c 『岩沼市・原遺跡第3次調査の概要』『平成30年度宮城県遺跡調査成果発表会』発表要旨
- 岩沼市教育委員会 2019 a 『原遺跡第3次調査概要報告書』 岩沼市文化財調査報告書第21集
- 岩沼市教育委員会 2019 b 『市内遺跡調査報告書1』 岩沼市文化財調査報告書第22集
- 岩沼市教育委員会 2019 c 『熊野遺跡第1・2次調査報告書』 岩沼市文化財調査報告書第23集
- 岩沼市史編纂委員会 2015 『岩沼市史』第4巻 資料編I 考古
- 岩沼市史編纂委員会 2018 『岩沼市史』第1巻 通史編I 原始・古代・中世
- 蘿王町教育委員会 1997 「堀の内遺跡」蘿王町文化財調査報告書第1集
- 仙台市教育委員会 1994 「仙台市中田南遺跡—古代・中世の集落跡の調査—」仙台市文化財調査報告書第182集
- 仙台市教育委員会 2003 「国分寺東遺跡Ⅱ 発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第266集
- 東北福祉大学吉井ゼミナール 2011 「鶴ヶ崎城跡(岩沼市)」第10次発掘調査報告書』
- 千葉 宗久 2015 〔II. 4-11 朝日古墳群〕『岩沼市史』第4巻 資料編I 考古
- 宮城県教育委員会 1981 「長者原貝塚 上新田遺跡」宮城県文化財調査報告書第78集
- 宮城県教育委員会 1993 『北原遺跡』宮城県文化財調査報告書第159集
- 宮城県教育委員会 1996 「山王遺跡IV—多賀前地区考察編」宮城県文化財調査報告書第171集
- 宮城県教育委員会 2001 「山王遺跡八幡地区的調査2—県道「泉一塙釜線」開闢調査報告書IV—古墳時代後期 SD2050B 河川跡 楊」宮城県文化財調査報告書第186集
- 宮城県教育委員会 2009 「原田遺跡・下萩沢遺跡—一般国道4号茶館バイパス開通遺跡調査報告書I—」宮城県文化財調査報告書第219集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1985 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1984 多賀城跡』
- 多賀城跡調査研究所 1992 「多賀城跡」宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991
- 宮城県多賀城跡研究所 1992 「東山遺跡IV—美賀郡街路推定地—」多賀城開通遺跡発掘調査報告書第17冊
- 村田 晃一 1994 「土器からみた官衙の終末—東北地方の場合—」『古代官衙の終末をめぐる諸問題 第1分冊問題提起・各地方の概要』 東日本埋蔵文化財研究会
- 村田 晃一 2007 「V. 宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』
- 東北学院大学文学部

報告書抄録

ふりがな	しないいせきはつくちょうさほうこくしょ							
書名	市内遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次	2							
シリーズ名	岩沼市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第25集							
編集者名	川又隆典・武田裕光・太田昭夫							
編集機関	岩沼市教育委員会							
所在地	〒 989-2480 宮城県岩沼市桜1丁目6-20 TEL(0223) 22-1111							
発行年月日	西暦 2020年3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °			
原遺跡	岩沼市南長谷字原	42111	15053	38.05.11	140.51.09	2019.10.3 ～ 2019.11.21	60 m ²	太陽光 発電施設
鶴ヶ崎城跡	岩沼市栄町一丁目	42111	15023	38.06.56	140.51.43	2019.03.28	12 m ²	分譲住宅
台遺跡	岩沼市南長谷字台	42111	15066	38.05.51	140.50.31	2019.05.22	12 m ²	個人住宅
丸山遺跡	岩沼市二木二丁目	42111	15055	38.06.24	140.51.49	2019.06.04	30 m ²	宅地造成
原遺跡	岩沼市南長谷字上原	42111	15053	38.05.11	140.51.06	2019.07.18	10 m ²	農業倉庫
原遺跡	岩沼市南長谷字上原	42111	15053	38.04.58	140.50.57	2019.07.23	6 m ²	個人住宅
鶴ヶ崎城跡	岩沼市栄町一丁目	42111	15023	38.06.56	140.51.55	2019.08.08	6 m ²	個人住宅
原遺跡	岩沼市南長谷字上原	42111	15053	38.05.03	140.51.04	2019.08.09	1 m ²	個人住宅
丸山遺跡	岩沼市二木二丁目	42111	15055	38.06.32	140.51.50	2019.08.27	12 m ²	集合住宅
二木横穴墓群	岩沼市二木二丁目	42111	15008	38.06.19	140.51.42	2019.10.03	12 m ²	店舗
下野郷遺跡	岩沼市下野郷字瀬外	42111	15040	38.07.24	140.54.10	2019.10.05	6 m ²	個人住宅
上根崎遺跡	岩沼市長岡字雲井	42111	15030	38.07.33	140.51.15	2019.10.24	2 m ²	個人住宅
原遺跡	岩沼市南長谷字原	42111	15053	38.05.06	140.51.14	2019.11.19	24 m ²	分譲住宅
所収遺跡	種別	古墳時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
原遺跡	官衙関連施設 集落跡	奈良・平安時代	堅穴建物跡 柱穴跡	土師器 須恵器	堅穴建物跡を多數発見。また遺跡の外縁と考えられる大溝を発見。			
鶴ヶ崎城跡	集落跡・城館	圓文・弥生・中世・近世	なし	なし				
台遺跡	散布地	圓文・弥生	なし	近世陶磁器				
丸山遺跡	集落跡	中世・近世	井戸跡 溝跡	土器				
原遺跡	官衙関連施設 集落跡	古墳時代 奈良・平安時代	なし	なし				
原遺跡	官衙関連施設 集落跡	古墳時代 奈良・平安時代	なし	土師器 須恵器				
鶴ヶ崎城跡	集落跡・城館	圓文・弥生・中世・近世	なし	なし				
原遺跡	官衙関連施設 集落跡	古墳時代 奈良・平安時代	柱穴跡	土師器 近世陶磁器	柱立建物跡の柱穴を発見。			
丸山遺跡	集落跡	中世・近世	埴跡	なし				
二木横穴墓群	古墳	古墳後	なし	なし				
下野郷遺跡	集落跡	古代・中世・近世	なし	近世陶磁器				
上根崎遺跡	集落跡	圓文・弥生・古代・中世	なし	なし				
原遺跡	官衙関連施設 集落跡	古墳時代 奈良・平安時代	なし	なし				
要約		玉前駅周辺遺跡とみられる原遺跡では、遺跡の北縁で実施した第12地点の調査において、多数の堅穴建物跡を発見した。これらは駅家の維持・管理に関わる駅戸集落の可能性が考えられる。また2時期の造り替えが行われた大溝は、阿武隈川から物資を運び入れる運河。あるいは水路と考えられる。 原遺跡第11地点の調査では、大型の柱穴を発見したことから、第3次調査で発見した官衙的な建物群が、西側へも展開することが判明した。						

宮城県岩沼市文化財調査報告書第25集
市内遺跡発掘調査報告書 2

令和2年3月
発行 岩沼市教育委員会

岩沼市桜1丁目6番20号
生涯学習課 TEL0223(22)1111 内線573

印刷 今野印刷株式会社
仙台市若林区六丁の目西町2-10
TEL022(288)6123

